千葉県教育振興財団調査報告第785集

首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書39

－ 成田市一坪田入Ⅱ遺跡(3)～(5)・多古町五反田栗島遺跡(1) －

令和３年３月

東日本高速道路株式会社
公益財団法人　千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書39

－成田市一坪田入Ⅱ遺跡(3)～(5)・多古町五反田栗島遺跡(1)－

序　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として、昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第785集として、首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴って実施した成田市一坪田入Ⅱ遺跡・香取郡多古町五反田栗島遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

これらの調査では、縄文時代早期を中心とする遺構・遺物が検出され、この地域の歴史を知るうえで貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

令和３年３月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理事長　稲　葉　　泰

凡　例

1　本書は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社による首都圏中央連絡自動車道（大栄～横芝）建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書は、下記の２遺跡を収録したものである。

一坪田入Ⅱ遺跡　成田市多良貝245-531ほか　（遺跡コード　211-090）

五反田栗島遺跡　香取郡多古町五反田字栗島91の一部ほか（遺跡コード　347-023）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は、第１章第１節に記載した。

5　本書の執筆は、上席文化財主事　小林清隆が、編集を、小林及び主任上席文化財主事　渡邊修一が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、成田市教育委員会、多古町教育委員会、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社の御指導・御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は、以下のとおりである。

第３・４図　国土地理院発行　1/25,000地形図「新東京国際空港」（NI-54-19-10-1）（平成４年発行）

第５・27図　国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所による現況図

8　本書で使用した航空写真は、以下のとおりである。

図版１　　国土地理院空中写真 CKT921X-C20-9　（平成４年10月撮影）

図版18　　国土地理院空中写真 CKT793-C19B-25（昭和54年12月撮影）

9　本書で使用した座標は、世界測地系であり図面の方位は全てその座標北を示す。

10　土器断面図内の「●」は、胎土中に繊維を含有していることを示す。

本文目次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査の経緯と経過 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 2
　第３節　遺跡の位置と環境 …… 3
　　1　地理的環境 …… 3
　　2　歴史的環境 …… 3
第２章　一坪田入Ⅱ遺跡(3)～(5) …… 7
　第１節　遺跡の概要 …… 7
　第２節　検出した遺構 …… 7
　第３節　出土した遺物 …… 9
　　1　(3)･(4)出土縄文土器 …… 9
　　2　(5)出土縄文土器 …… 27
　　3　縄文時代の土製品 …… 30
　　4　縄文石器 …… 30
第３章　五反田栗島遺跡(1) …… 40
　第１節　遺跡の概要 …… 40
　第２節　検出遺構と出土遺物 …… 40
　　1　検出した遺構 …… 40
　　2　出土した遺物 …… 42
第４章　まとめ …… 53
　　1　一坪田入Ⅱ遺跡(3)～(5) …… 53
　　2　五反田栗島遺跡(1) …… 54

報告書抄録 …… 巻末

挿図目次

第１図　遺跡位置概略図 …… 1
第２図　グリッドの呼称例 …… 2
第３図　一坪田入Ⅱ遺跡の位置と周辺の地形 …… 4
第４図　五反田栗島遺跡の位置と周辺の地形 …… 5
一坪田入Ⅱ遺跡
第５図　遺跡の地形と調査区割 …… 8
第６図　(4)SK001 …… 9
第７図　掲載撚糸文系土器分布 …… 11
第８図　(3)・(4)出土縄文土器１ …… 12
第９図　(3)・(4)出土縄文土器２ …… 13
第10図　(3)・(4)出土縄文土器３ …… 14
第11図　(3)・(4)出土縄文土器４ …… 15
第12図　(3)・(4)出土縄文土器５ …… 17
第13図　(3)・(4)出土縄文土器６ …… 18
第14図　(3)・(4)出土縄文土器７ …… 19
第15図　(3)・(4)出土縄文土器８ …… 20
第16図　(3)・(4)出土縄文土器９ …… 21
第17図　(3)・(4)出土縄文土器10 …… 23
第18図　(3)・(4)出土縄文土器11 …… 25
第19図　(3)・(4)出土縄文土器12 …… 26
第20図　(5)出土縄文土器１ …… 28
第21図　(5)出土縄文土器２ …… 29
第22図　(3)～(5)出土土製品 …… 29
第23図　(3)～(5)石器出土分布 …… 31
第24図　(3)～(5)出土縄文石器１ …… 33
第25図　(3)～(5)出土縄文石器２ …… 35
五反田栗島遺跡
第26図　SK001 …… 40
第27図　遺跡の地形と調査区割 …… 41
第28図　縄文土器１ …… 43
第29図　縄文土器２ …… 44
第30図　縄文土器３ …… 46
第31図　中期の土器分布 …… 47
第32図　縄文土器４ …… 48
第33図　縄文土器５ …… 49
第34図　土製品 …… 50
第35図　古墳時代以降の遺物 …… 50
第36図　縄文石器 …… 52

表目次

第１表　発掘調査一覧 …… 2
第２表　一坪田入Ⅱ遺跡(3)・(4)縄文土器群別重量比 …… 10
第３表　一坪田入Ⅱ遺跡出土石器集計表 …… 37
第４表　一坪田入Ⅱ遺跡出土石器属性表 …… 38
第５表　五反田栗島遺跡出土土製品一覧 …… 51
第６表　五反田栗島遺跡出土石器属性表 …… 51

図版目次

一坪田入Ⅱ遺跡
図版１　一坪田入Ⅱ遺跡周辺航空写真
図版２　一坪田入Ⅱ遺跡(3)・(4)
図版３　一坪田入Ⅱ遺跡(3)～(5)
図版４　(3)・(4)出土縄文土器１
図版５　(3)・(4)出土縄文土器２
図版６　(3)・(4)出土縄文土器３
図版７　(3)・(4)出土縄文土器４
図版８　(3)・(4)出土縄文土器５
図版９　(3)・(4)出土縄文土器６
図版10　(3)・(4)出土縄文土器７
図版11　(3)・(4)出土縄文土器８
図版12　(3)・(4)出土縄文土器９
図版13　(3)・(4)出土縄文土器10
図版14　(3)・(4)出土縄文土器11
図版15　(5)出土縄文土器１
図版16　(5)出土縄文土器２・(3)～(5)出土土製品
図版17　(3)～(5)出土石器
五反田栗島遺跡
図版18　五反田栗島遺跡周辺航空写真
図版19　五反田栗島遺跡(1)
図版20　縄文土器１
図版21　縄文土器２
図版22　縄文土器３
図版23　縄文土器４・土製品
図版24　縄文石器

第１章　はじめに

第１節　調査の経緯と経過

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、首都圏の道路交通の円滑化・環境改善などを目的として、国土交通省が、都心から半径およそ40km～60kmの範囲に計画した総延長約300kmに及ぶ高規格幹線道路である。首都圏の広域的な幹線道路網整備の一環として、神奈川県・東京都・埼玉県・茨城県・千葉県内の沿線諸都市を環状に連絡する圏央道は、茨城県稲敷市から利根川を渡って千葉県内に入り、香取郡神崎町から南下して木更津市まで90km以上延伸する。国土交通省は、圏央道千葉区間建設事業実施にあたり、事業地内における埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県教育委員会へ協議を依頼した。これに対し千葉県教育委員会は、複数の埋蔵文化財包蔵地が所在する旨の回答を行った。これを受け、それらの取扱いについて関係諸機関で慎重な協議を重ねた結果、事業計画の変更が不可能な部分は、やむをえず記録保存の措置を講ずることとなり、調査を財団法人千葉県教育振興財団（平成24年４月１日公益財団法人に移行）が実施することとなった。　圏央道千葉区間のうち、東関東自動車道と接続する大栄ＪＣＴから、銚子連絡道に接続する松尾横芝ＩＣまでの18.5㎞（大栄～横芝）区間については、平成26年度に発掘調査を開始し、現在も調査を継続中である。

本書では、平成28年度～平成30年度に実施した圏央道（大栄～横芝）区間北部に位置する成田市一坪田入Ⅱ遺跡(3)・(4)・(5)と、香取郡多古町五反田栗島遺跡(1)について報告する（第１図）。

各遺跡の発掘調査の調査組織および担当者等は、第１表のとおりである。

整理作業の調査組織および担当者は、以下のとおりである。

平成30年度

文化財センター長	鳥立　桂
整理課長	田島　新
内　　容	水洗・注記の一部

平成31年度（令和元年度）

文化財センター長	鳥立　桂
主幹兼調査第一課長	田島　新
担当職員	主任上席文化財主事　沖松信隆
	上席文化財主事　小林清隆

第１図　遺跡位置概略図

内　　容　　記録整理、水洗・注記の一部～編集の一部

令和２年度

文化財センター長　　福田　誠

主幹兼調査第一課長　田島　新

担当職員　　主任上席文化財主事　渡邉修一

内　　容　　編集の一部～刊行

第１表　発掘調査一覧

一坪田入Ⅱ遺跡

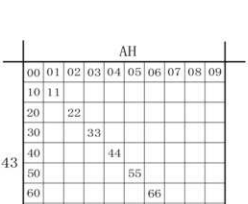
年度	調査次数	対象面積	確認調査（㎡）		本調査（㎡）		調査期間	担当者	調査課長	文化財センター長
		(㎡)	上層	下層	上層	下層				
平成28年度	(3)	451	44	8	350	0	28.8.9 ～ 28.9.27	岡田誠造	蜂屋孝之	上守秀明
平成30年度	(4)	1,887	188	24	900	0	30.6.1 ～ 30.10.23	沖松信隆	蜂屋孝之	島立　桂
	(5)	280	280	8	120	0	30.10.24 ～ 30.11.7	沖松信隆 糸川道行	蜂屋孝之	島立　桂

五反田栗島遺跡

年度	調査次数	対象面積	確認調査（㎡）		本調査（㎡）		調査期間	担当者	調査課長	文化財センター長
		(㎡)	上層	下層	上層	下層				
平成29年度	(1)	2,413	243	4	0	0	29.11.6 ～ 29.11.17	麻生正信	蜂屋孝之	上守秀明

第２節　調査の方法

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）大栄～横芝区間建設予定地内に所在する遺跡群の調査は、世界測地系（平面直角座標第Ⅸ系）に基づく方眼網に従い、北西隅に基点を置く40m区画（大グリッド）を設定して実施した。大グリッドは、全体の基点をX＝－20,920.000、Y＝50,520.000に置き、この点から40mごとに南へ１・２・３…を、東へA・B・C…Z・AA・AB…を割り当て、両者を組み合わせた５A、54ANなどを大グリッドの呼称とした。本書で報告する一坪田入Ⅱ遺跡の遺跡範囲を大グリッドで示すならば、北端が34AB、南端が38AEとなり、五反田栗島遺跡は212DF・DG・DHになる。また、大グリッド内を一辺４mの方形区画に100分割して小グリッドを設定した。小グリッドの呼称は２桁の番号とし、35AB-55のように大グリッド名と小グリッド番号を組み合わせることにより、調査地の平面的位置を示している。小グリッド番号は、大グリッドの北西隅を基点00とし、北東隅が09、南西隅が90、南東隅が99となるように順次割り当てた。



第２図　グリッドの呼称例

第３節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

圏央道大栄JCTから松尾横芝ICに至る事業区間内は成田市、山武郡芝山町、香取郡多古町、山武郡横芝光町、山武市の２市３町に亘り、調査対象の埋蔵文化財包蔵地が38遺跡存在する。遺跡の多くは台地上に立地するが、調査対象地域は利根川水系と栗山川水系の分水界を擁し、かつ、谷津が複雑に入り込んだ下総台地中央部を南北に縦貫していることから、個々の遺跡をとりまく地理的環境は多様である。大栄JCT寄りの成田市内の遺跡の多くは、傾斜する台地縁辺部に立地する区域が対象である。また、高谷川沿いの水田地帯には、低地から発見される遺跡が存在し、一例として山武郡芝山町・横芝光町の町域を越えて広がる高谷川低地遺跡（（公財）千葉県教育振興財団2019a）などを挙げることができる。

本書で報告する２遺跡の一つである一坪田入Ⅱ遺跡は、成田市（旧大栄町）多良貝（たらがい）付近に源を発し、成田市磯部付近で根木名（ねきな）川と合流したのち利根川に流入する尾羽根（おばね）川上流域の谷津側に傾斜する位置に立地する。

また、五反田栗島遺跡は、西側の高谷川、東側の多古橋川によって開析されて南北方向に連続する標高38m前後の台地（通称十余三台地）内に立地する。特に多古川側に開口した東西方向の谷津に挟まれ、当遺跡の事業範囲は、中央部で北東側からと南側の小谷津によって狭まり、平坦な台地がわずかであり、斜面は急峻である。また、通常の下総台地で確認される立川ローム層より薄い傾向が顕著である。

２　歴史的環境

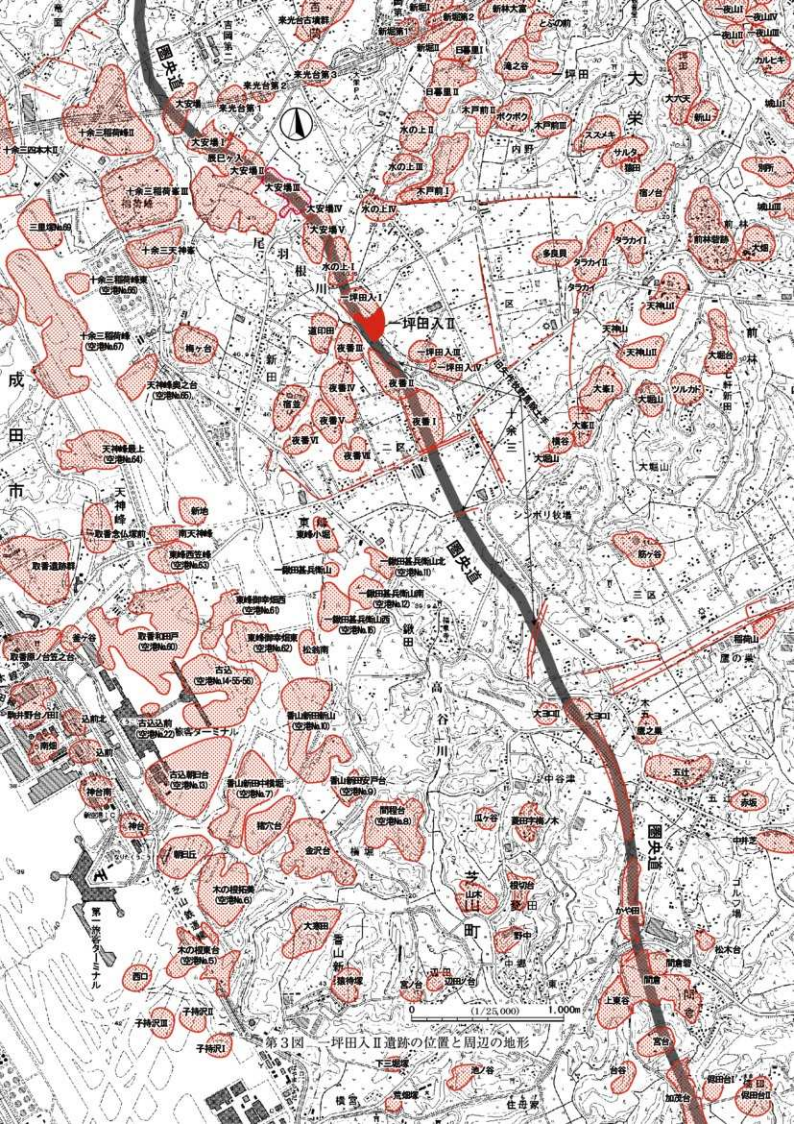
この地域の西隣には成田国際空港があり、また、北隣には東関東自動車道が敷設されていることから、これらの建設事業等に伴う発掘調査が多く実施されてきた。また、大栄JCT以北の圏央道事業地内の成田市域（旧香取郡下総町域）においても調査成果が蓄積されている。

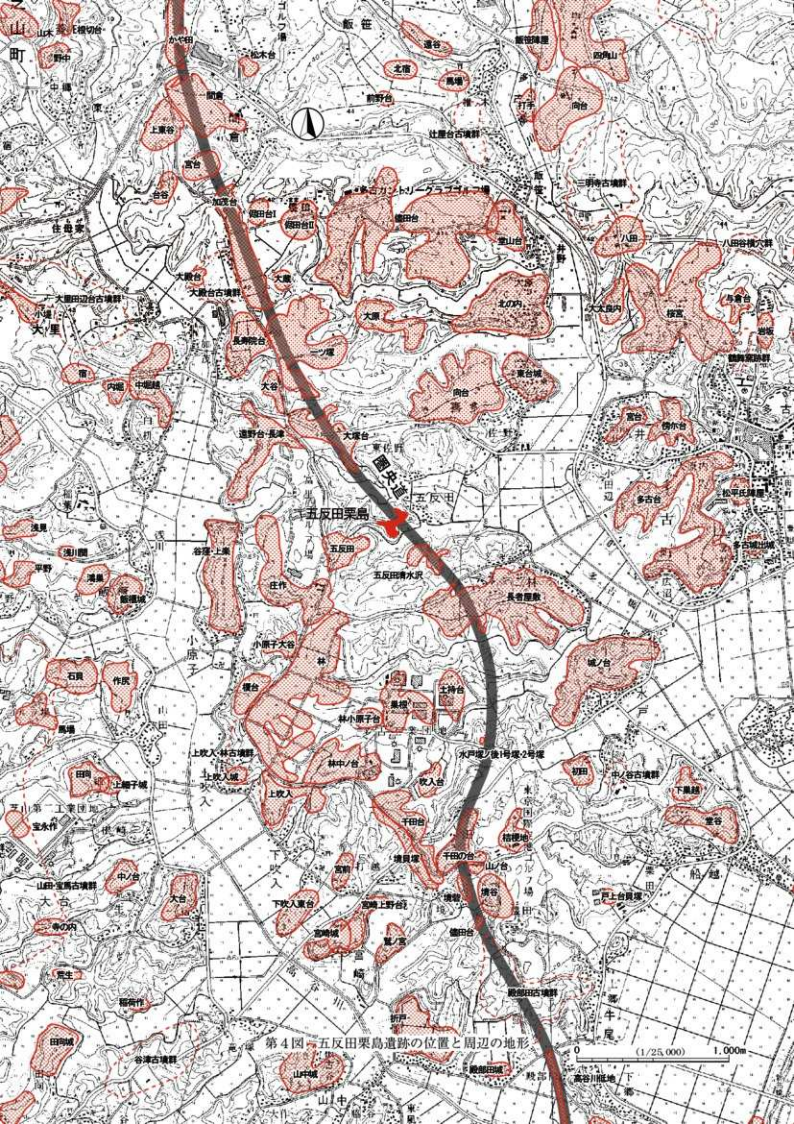
圏央道（大栄～横芝）区間事業地内の38遺跡のうち、尾羽根川上流域の成田市域には、本書で報告する遺跡以外に、大安場Ⅰ遺跡、辰巳ケ入遺跡、大安場Ⅳ遺跡、大安場Ⅴ遺跡、一坪田入Ⅰ遺跡、一坪田入Ⅱ遺跡（1）・（2）、水の上Ⅰ遺跡、夜番Ⅱ遺跡、夜番Ⅰ遺跡が所在し、すでに発掘調査が実施され、その成果を報告している（（公財）千葉県教育振興財団2019b）（第３図）。

周辺では、空港用地内で旧石器時代の遺跡が多数調査され、年代的に最も遡る立川ロームⅨ層から最も新しいⅢ層までの石器集中地点が多数検出されている（永塚俊司2000）。一坪田入Ⅱ遺跡の南東に所在する圏央道の路線上に立地する夜番Ⅱ遺跡では、Ⅸａ層上部に生活面を持つと考えられる９か所の石器集中地点が検出され、201点の石器が出土している。

縄文時代では、空港用地内の遺跡を主体に早期の土器群を出土する遺跡が多く分布するほか、その時期の竪穴建物跡や陥穴が検出されており、県内の遺跡分布でも濃密な状況がみられる地域といえる。大安場Ⅰ遺跡の調査では、野島式土器を主体に条痕文系土器が出土している。前期～晩期について当該地域内に目立った集落遺跡はみられないものの、土器については各所から出土している。一坪田入Ⅱ遺跡では少量であるが晩期末葉の荒海式土器が出土している。その荒海貝塚は、尾羽根川が根木名川と合流する地点付近に立地する。

一方、太平洋水系に帰属する五反田栗島遺跡周辺には、旧石器時代の遺跡も多く知られているが、縄文時代と古墳時代が中心となる遺跡が台地上に分布している。


坪田入Ⅱ
坪田入Ⅰ
坪田入Ⅲ
坪田入Ⅳ
坪田入Ⅴ
坪田入Ⅵ
坪田入Ⅶ
坪田入Ⅷ
坪田入Ⅸ
坪田入Ⅹ
坪田入Ⅺ
坪田入Ⅻ
坪田入ⅩⅢ
坪田入ⅩⅣ
坪田入ⅩⅤ
坪田入ⅩⅥ
坪田入ⅩⅦ
坪田入ⅩⅧ
坪田入ⅩⅨ
坪田入ⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ
坪田入ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ
坪田入Ⅹ



第４図　五反田栗島遺跡の位置と周辺の地形

旧石器時代の遺跡は、本遺跡の南方１km前後に位置する多古工業団地造成に伴う調査で（(財）千葉県文化財センター 1986)、石器集中地点が34か所検出されている。

縄文時代の遺跡は、高谷川流域・多古橋川流域の両岸に所在し、多古工業団地の地域に分布が濃い傾向がみられる。その多古工業団地関連の調査では、全体で陥穴30基・炉穴20基などが検出され、土器は早期主体に晩期まで出土している。本遺跡の東方約1.2km ～２kmの多古台遺跡では、竪穴建物跡６棟が検出され、縄文土器は早･前期主体となる（日本文化財研究所1976、(財）香取郡市文化財センター 1992ほか)。まとまった遺物が出土した遺跡としては、芝山町境貝塚で、中期の阿玉台式土器～加曽利Ｅ式土器、後期の称名寺式土器～堀之内式土器、さらに晩期の土器群が出土している（多古町1985)。本遺跡と谷を隔てて位置する五反田清水沢遺跡の調査では、前期後葉から阿玉台式期にかけての竪穴建物跡12棟が検出されている（(公財）千葉県教育振興財団2019)。

古墳時代の遺跡は、山田・宝馬古墳群などの広域の古墳群が存在し、また、高谷川流域では点在したあり方で、多古橋川流域は北部に多い傾向である。集落は多古橋川流域の北部に多く、多古工業団地周辺に濃い傾向がみられる。本遺跡で検出された前・中期の遺跡は少ないが、中期の集落は芝山町遠野台・長津遺跡、上吹入遺跡、多古町折戸遺跡等でみられる。多古工業団地の調査では、土持台遺跡で５世紀～７世紀代の集落が検出され、林中ノ台遺跡では後期の竪穴建物跡２棟と円墳２基が検出された。多古台遺跡では、前・中期の竪穴建物跡18棟、古墳25基が調査されている。五反田栗島遺跡と近接する五反田清水沢遺跡では、古墳時代前期～中期の竪穴建物跡12棟が検出されている。この遺跡で注目されるのは、古墳時代中期の竪穴建物跡８棟から滑石が多量に出土し、臼玉や有孔円板を製作する石製模造品工房の存在が判明したことである。周辺には多古町林遺跡や芝山町上吹入遺跡など、石製模造品の工房が発見されており(小林1995)、生産遺跡の密集する地域であることを裏づけている。

引用参考文献

(公財)千葉県教育振興財団 2019a 「横芝光町高谷川低地遺跡　姿を現した縄文時代の舟」『房総の文化財』VOL.58

(公財)千葉県教育振興財団 2019b 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書34 －成田市大安場Ⅰ遺跡・辰巳ケ入遺跡・大安場Ⅳ遺跡・大安場Ⅴ遺跡・水の上Ⅰ遺跡・一坪田入Ⅱ遺跡・夜香Ⅱ遺跡・夜香Ⅰ遺跡－』

(公財)千葉県教育振興財団 2019c 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書35 －多古町五反田清水沢遺跡(1)－』

小林清隆 1995「房総の石製模造品製作 －臼玉の製作について－」『研究紀要』16 (財) 千葉県文化財センター

(財)香取郡市文化財センター 1992・2002・2003 『多古台遺跡群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』

(財)千葉県文化財センター 1986 『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書－林小原子台･巣根･土持台･林中ノ台･吹入台－』

多古町 1985『多古町史　上巻』

日本文化財研究所 1976『多古台遺跡群調査概報』

永塚俊司 2000「新東京国際空港予定地内遺跡群」『千葉県の歴史　資料編　考古１』千葉県

第２章　一坪田入Ⅱ遺跡(3)～(5)

第１節　遺跡の概要

成田市（旧香取郡大栄町）多良貝245-534ほかに所在する一坪田入Ⅱ遺跡は、尾羽根川上流域右岸、台地縁辺斜面裾部低位段丘上（標高34m前後）に立地する（第５図）。利根川水系と栗山川水系との分水界まで約0.7km地点、尾羽根川が最上流域で二股に分かれる地点の右岸に位置している。なお、遺跡西方の尾羽根川が形成する谷津の標高は30m前後、遺跡東方の台地上平坦面の標高は40m前後である。全域で北東側から南西側に向かって傾斜している。

本書では、平成28年度に実施した３次調査（以下(3)）、平成30年度に実施した４次調査（以下(4)）、さらに同年に調査を行った５次調査（以下(5)）の成果について報告する。調査区割およびトレンチ配置は第５図のとおりである。台地縁辺沿いに北西から南東へ帯状に広がる対象範囲を大グリッド表記で記すと、34AB・34AC・35AC・35AD、36AC・36AD、37AD・37AE、38AEとなる。

(3)は、すでに成果を報告した(1)の北側に接続する451㎡を対象として実施した。等高線と直交するような配置で設定したトレンチ調査の結果、(1)の北西部に隣接して縄文時代早期の土器片が出土したため、包含層350㎡を拡張した。当区域内からは縄文土器のほか縄文時代の石器などが出土した。下層の確認調査では、遺構・遺物は検出されなかった。ただ、拡張した包含層から縄文時代の石器が出土している。

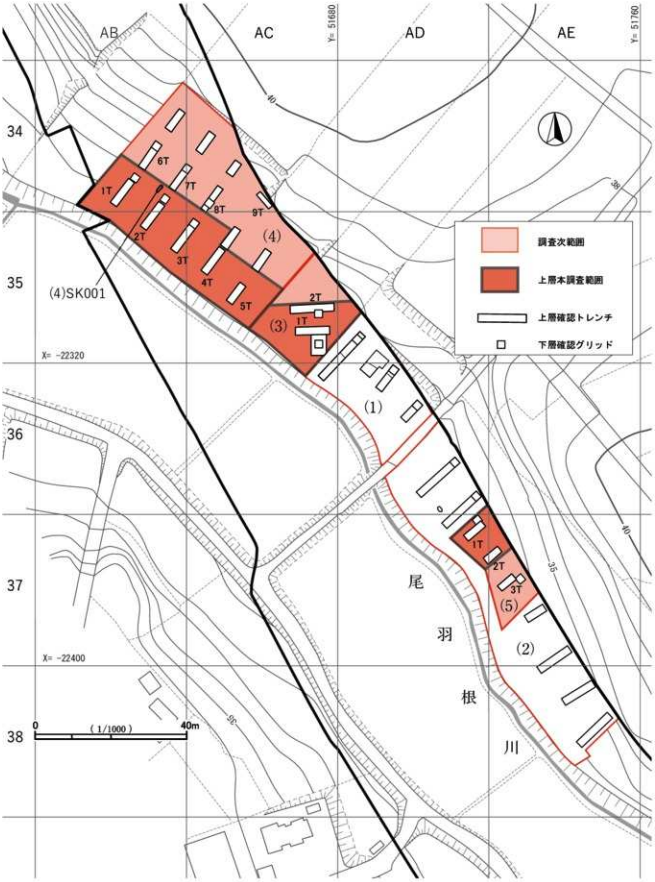
(4)は、(3)から北西側に続く1,887㎡の低位段丘面を対象として実施した。トレンチ調査の結果、尾羽根川寄りの調査区南西部において、縄文時代早期～晩期の遺物包含層を検出した。これを受け、900㎡について本調査に移行した結果、遺物包含層の下から縄文時代早期の陥穴１基を検出した。下層については、遺構・遺物とも出土せず、確認調査で調査を終了した。

(5)は、すでに報告済みである(2)の中央部に未調査区が残されていた部分に相当し、その280㎡の低位段丘面を対象として実施した。トレンチ調査の結果、調査区の北側において、縄文時代早期の遺物包含層を検出し、120㎡について本調査に移行した。下層については、遺構・遺物とも出土せず、確認調査で調査を終了した。

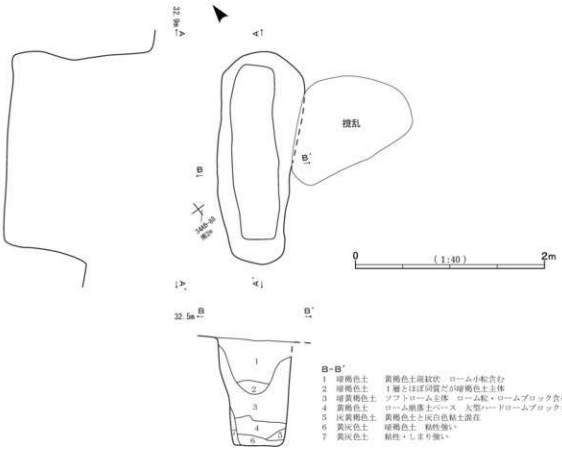
第２節　検出した遺構

SK001（第６図、図版２）

SK001は、この地区で唯一の遺構で、(4)の34AB-88グリッドに位置する。検出面での平面形態が隅丸長方形を呈する陥穴である。ローム層上面から掘り込まれている。一部に撹乱を受けているが、遺構を大きく破壊する規模ではない。長軸2.22m、短軸0.80m、確認面から底面までの深さは1.52mである。長軸方位はN－45°－Eを指し、等高線に対して直交する。底面の平面形は長方形を呈し、長軸1.84m、短軸0.52mで、南西方向にやや傾斜し、壁はわずかに開きながら立ち上がる。覆土は上層から中層にかけてはローム粒・ロームブロックを含み、特に４層で８cm程度の大きさのロームブロックが多く含まれている。下層は粘性を持ち、しまりの強い土が堆積する。時期決定可能な遺物は出土していないが、撚糸文系土器の細片が出土しているので、その時期である可能性が高い。



第５図　遺跡の地形と調査区割



第６図　(4) SK001

第３節　出土した遺物

出土遺物は、土器、土製品、石器類があり、遺物包含層から出土した。以下に出土した遺物について提示するが、(3)･(4)は本調査範囲が接続するので、まずこの２調査区から出土した土器を取り上げ、それに続いて (5)から出土した土器を掲載する。また、石器類についてはまとめて提示する。

1　(3)･(4)出土縄文土器

土器は、縄文時代早期から晩期に及んでいる。(3)･(4)から出土し、分類可能な土器片重量は30,148ｇである。これらを以下のように４群に大別を行うこととする。すでに報告した (1)･(2)では、後期と晩期を分けたが、ここでは細片を分けることが難しいので第４群としてまとめた。

第１群　早期の土器

第２群　前期の土器

第３群　中期の土器

第４群　後期～晩期の土器

第１群　早期の土器（第８図～第14図、図版４～図版11）

本群に比定した土器は、撚糸文系土器と条痕文系土器である。本群は重量比で全体に占める割合は59％で、その中では撚糸文系土器の割合が72％となり、出土土器全体の中心を占める。撚糸文系土器の分布状況は、調査区全域にみられ、条痕文系土器の分布は散漫である。

１類　井草式土器（第８図１～30、図版４）

全体が復元可能となる資料は存在せず、ほとんどが小さな破片である。第７図に掲載土器の分布状況を示したが、特に集中する状況は認められず、傾向として南東側に多く、北西側に少ない。これは斜面地で全体に傾斜している、ということから推測すれば、山側から谷側に向かって流れ込んだ状況と考えることができる。

第２表　(3)・(4) 縄文土器群別重量比

群	大別	重量 g	比
第１群	早期の土器	17,785	59.0%
第２群	前期の土器	5,513	18.3%
第３群	中期の土器	2,524	8.4%
第４群	後期～晩期の土器	4,327	14.4%
計		30,148	100.0%

１～８の口唇部は外反して肥厚し、そこに縄文を施文し、口唇部直下は無文である。小破片のため詳細は不明であるが、１・４の口唇部直下は指頭によって押捺されている。ほかはナデによる調整が行われ無文となる。胎土に乳白色の細粒を含んでいる。９～20は口唇部が外反肥厚ないし丸頭状を呈し、口唇部に縄文を施文し、その直下から胴部にかけて縄文の施文が認められる。９～13の口唇部はやや外反し、14～20は外反の程度が弱い。20は口径26cm内外であったと推定される。胴部上半にやや張りを持ち、砲弾形の底部に向かってすぼまっていくと考えられる。21～30は21を除くと口唇部の肥厚は弱く、丸頭状や角頭状を呈する。口唇部と口唇部直下から撚糸文を施文している。いずれも内面の状態が不良で、本来の調整痕をとどめていない。

２類　夏島式土器（第８図31～第10図109、図版５～図版７）

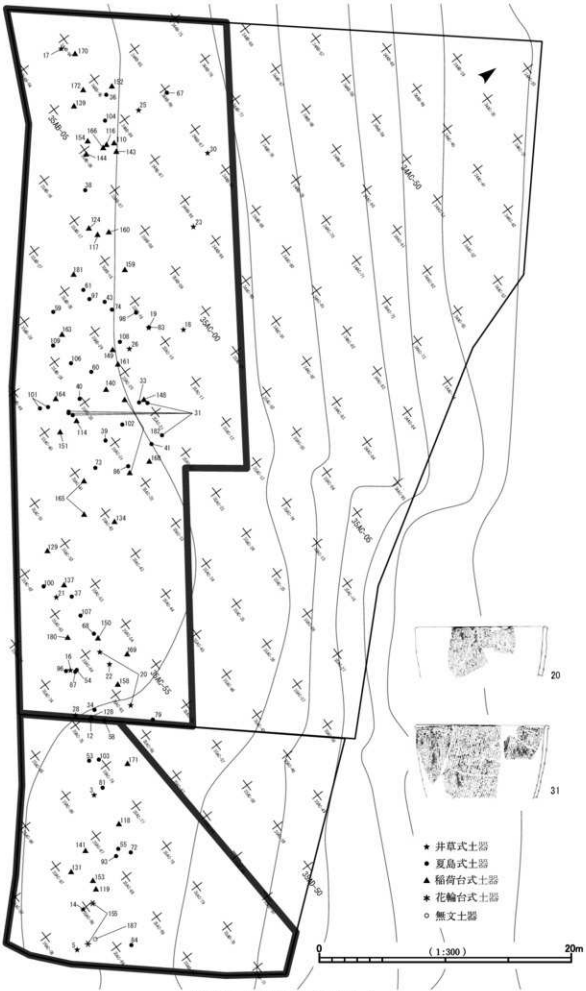
31～109は夏島式土器である。31は口縁部の４分の１が接合したものである。口唇部は小さく外反し、胴部の上位がわずかに膨らみ、底部にむかって次第にすぼまっていく形態となる。外反した口唇部の上面や外面に縄文は施されず、口唇部から胴部にかけて施文が行われる。復元口径は26.5cm内外になる。以下口縁部の破片の施文を見ると縄文と撚糸文の両者が存在し、撚糸文施文がやや多いとみられる。器形は31が基本形態になるが、40・63のように口縁部が直立気味に立ち上がるものや、78・79のように程度は弱いものの内彎気味に立ち上がるものがある。また、口唇部からやや下がった位置に孔の穿たれたものが存在する。33・42・89に認められる孔は、いわゆる補修孔として穿たれたと考えられる。穿孔の方向は表側からの片側からである。胎土については、乳白色を呈する細粒や石英の細粒を含む個体が目に付く。

３類　稲荷台式土器（第10図110～第11図154、図版７・８）

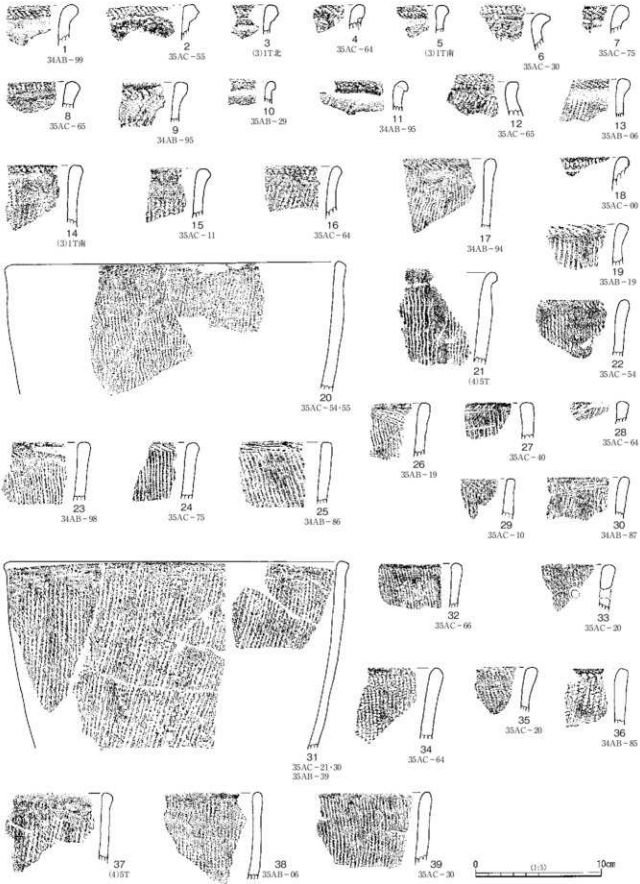
110～154を稲荷台式土器に比定した。夏島式土器との明瞭な識別が難しく、口唇部に無文部を設け、その下から施文が行われること、条の間隔がやや広くなることと、施文の深さが浅いという点にもとづいて分類した。感覚的な観点で分けたので、本来は夏島式土器にすべきであるところを稲荷台式土器にしているという危惧がある。器形が明らかになる資料は出土していない。口唇部は肥厚することなく丸頭状を呈し、口縁部は外反せずに上方に立ちあがるものが多い。一部140・141のようにわずかに内彎する場合もある。施文のタイミングが、夏島式土器よりも乾燥がやや進んだ段階なのか、120・121・126・136などは撚糸文の痕跡が非常に浅い。122は補修孔が認められ、138・139には焼成前に穿たれた小孔が、横方向に比較的狭い間隔で並んでいる。

４類　花輪台式土器（第11図155、図版８）

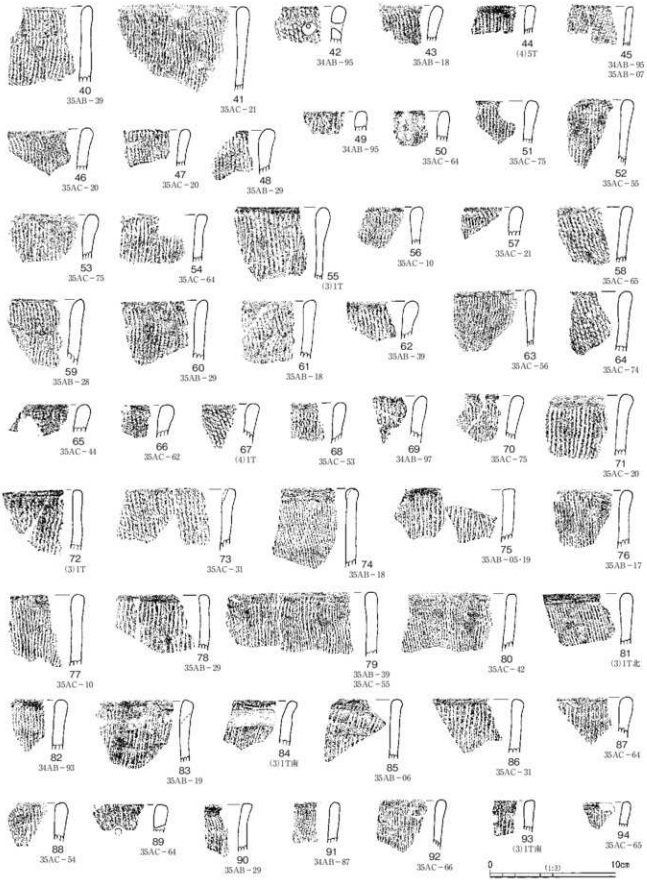
155は花輪台式土器である。今回比定した唯一の花輪台式土器の口縁部破片である。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は丸い。口縁部と胴部に羽状構成の縄文を施文し、口縁部と胴部の変換部に縄文原



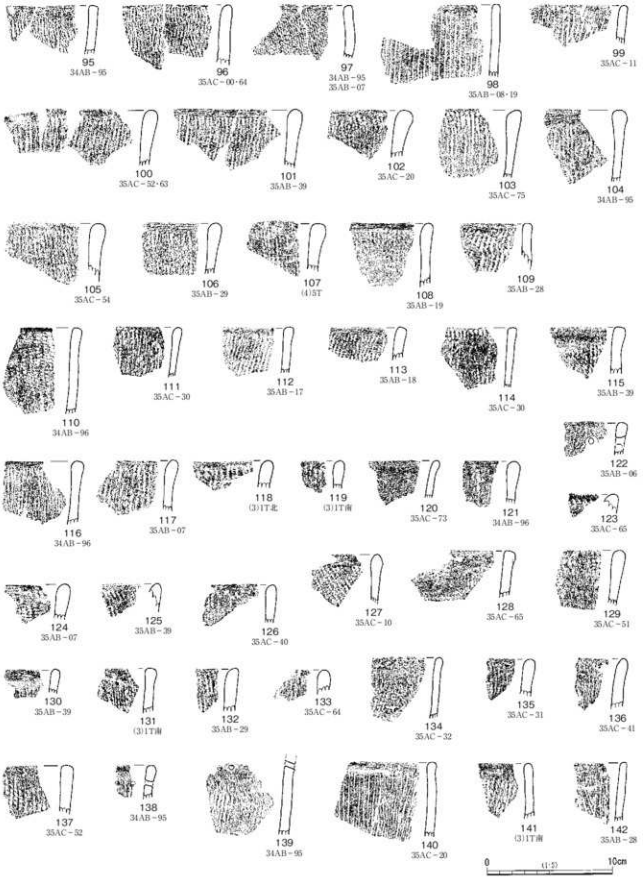
第７図　掲載撚糸文系土器分布



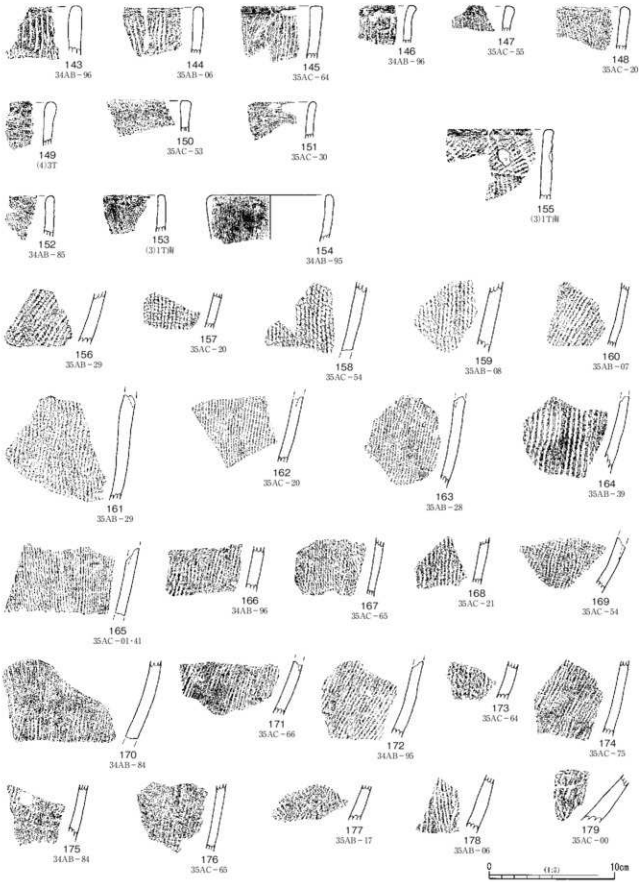
第８図　(3)・(4)出土縄文土器１



第９図　(3)・(4)出土縄文土器２



第10図　(3)・(4)出土縄文土器３



第11図　(3)・(4)出土縄文土器４

体を押圧している。口縁部は左上がりの斜方向に押圧する。口縁部の下位に表面から補修孔の穿孔を開始しているが、未貫通の状態で止めている。内面の仕上げは横方向のナデ調整である。

胴部～底部（第11図156～第12図182、図版９・10）

156～182は胴部～底部付近の破片である。すべてについて型式を識別することが困難なため、ここでまとめて呈示する。156～163は胴部下位付近まで縄文が施文されており、井草式土器の破片と考えられる。164～179は夏島式土器になろう。180～182はいわゆる砲弾形の底部で、いずれも同心円状の擦痕が認められる。

５類　無文の土器（第12図183～187、図版10）

撚糸文系土器後半期の無文土器と考えられる。183・184・186の口唇部はわずかに肥厚し、口縁部は少し傾斜しながら立ち上がる。表裏とも器面が荒れて調整については不明である。185は口唇部直下に凹線状の窪みが認められる。187は小型の深鉢型の口縁部である。

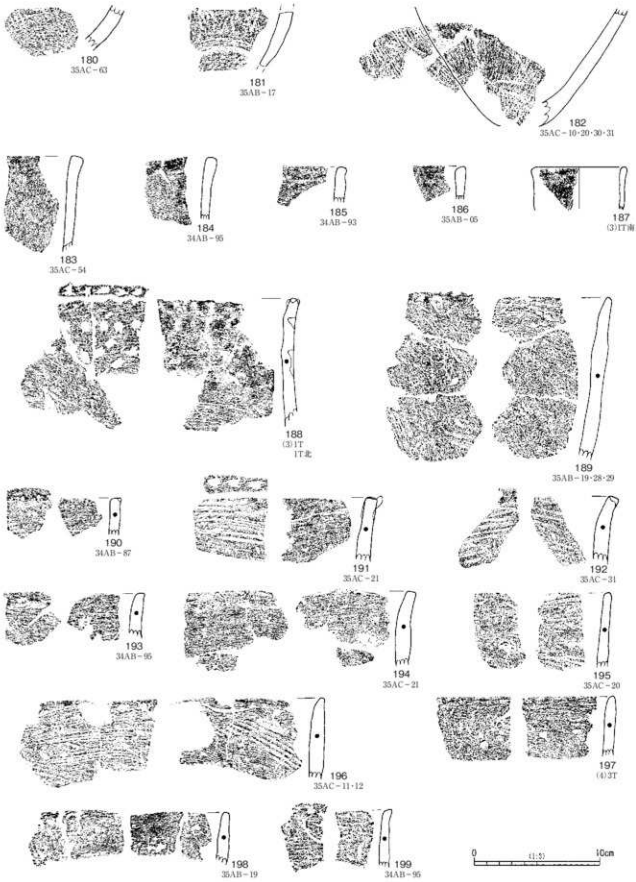
６類　条痕文系土器（第12図188～第14図227、図版10・11）

188～199・220は子母口式土器の口縁部と考えられる。188はわずかに反りを持たせるが、ほぼ真っ直ぐに立ち上がっていく深鉢の口縁部である。口唇部上面に連続的な刺突を加え、また、口縁部には同様の工具により斜め下から斜め上に向かって刺突を施している。さらにその下位にも斜位に加えられた刺突が認められる。外面の調整は擦痕状であり、内面は横方向の調整痕が認められる。胎土に含まれる繊維の量は少ない。189はやや開きながら立ち上がる口縁部である。装飾は加えられず、全体に擦痕状の調整痕が残る。190は口唇部が小さく外方に張り出し、そこに刻み目が施される。191は緩やかな波状口縁であったかもしれない。口唇部の一部が肥厚し、波頂部につながるような状態を呈し、口唇部上面に刺突が施されている。表面には横方向の条痕状の調整があり、裏面は擦痕状の調整が行われている。192は口唇部の刺突や調整の状態から、おそらく191と同一個体になろう193～199・220の口縁部の外反の度合いは弱く、上方に真っ直ぐに立ち上がっていく。遺存部に特に装飾は認められず、表裏に擦痕状の調整が行われている。196は横方向への調整が鮮明である。いずれも胎土に繊維を含むが、目立った量とはいえない。200～219・221～225は胴部～底部付近の破片である。広く括れば茅山式土器系に含まれようが、多くに口縁部に残された調整痕と近似する状態がみられる。個々の細別はできないが、その中で214～216の表面に残る条痕は鮮明である。226・227は底部である。胴部から底部にかけて緩やかに下降し、底部はやや丸くなり、砲弾形に近い形状になると推測される。226の外面は斜め方向や横方向に施された条痕が認められ、内面は主に斜め方向に行われている。227は縦方向の調整が内外面に施されている。

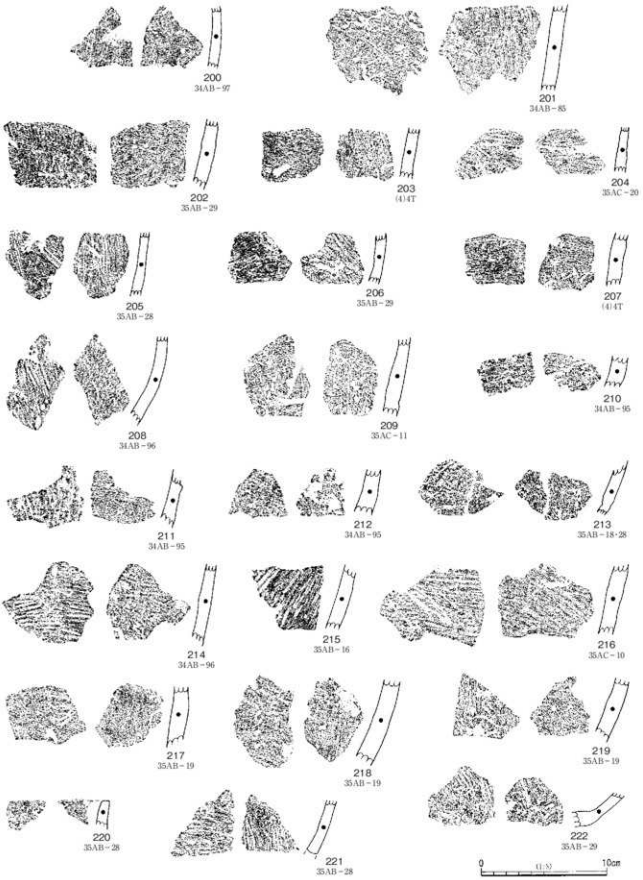
第２群　前期の土器（第15・16図、図版11・12）

本群は(3)の南側にやや集中するグリッドがあり、その分布は後述の第３群と距離を置いた状況である。比定した本群の重量は約5,513ｇで、全体の18％強になる。

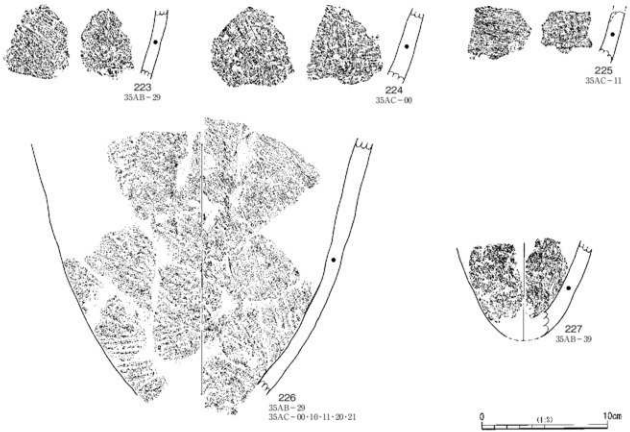
第15図228～236は波状貝殻文を施文した口縁部と胴部破片である。228は口縁部が直線的に外傾して開く深鉢である。口唇部に軽い押捺を加えて緩やかな波状口縁となる。口縁部直下から胴部にかけて波状貝殻文を施す。229も直線的に口縁部が立ち上がる深鉢で、口縁部直下から胴部にかけて波状貝殻文の施文が行われる。230～236は深鉢の胴部である。以上は浮島式土器の後半に位置づけられよう。237～243は口縁部から胴部にかけて条線か沈線が施されたものである。237は口唇部直下にわずかに斜方向となる沈線



第12図　(3)・(4)出土縄文土器５



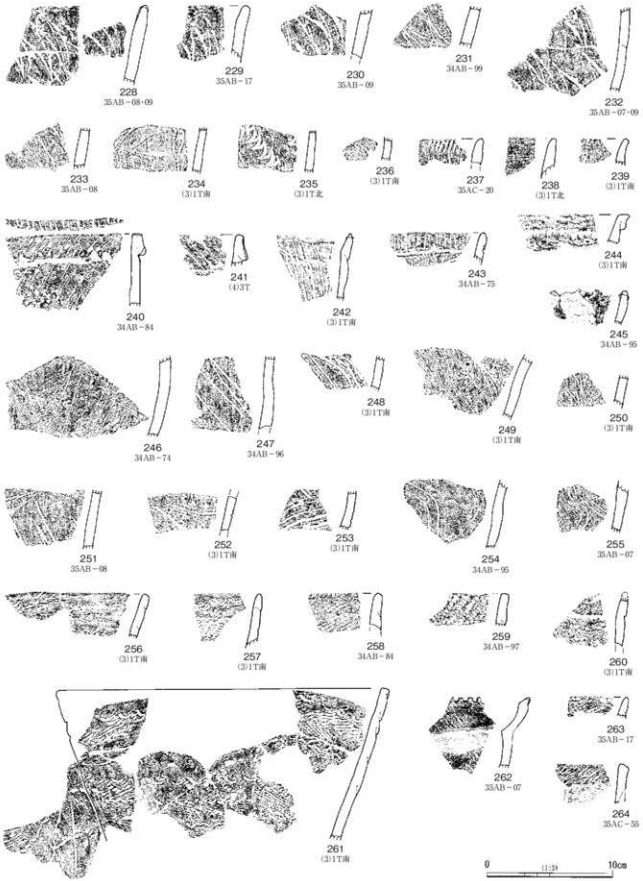
第13図　(3)・(4)出土縄文土器６



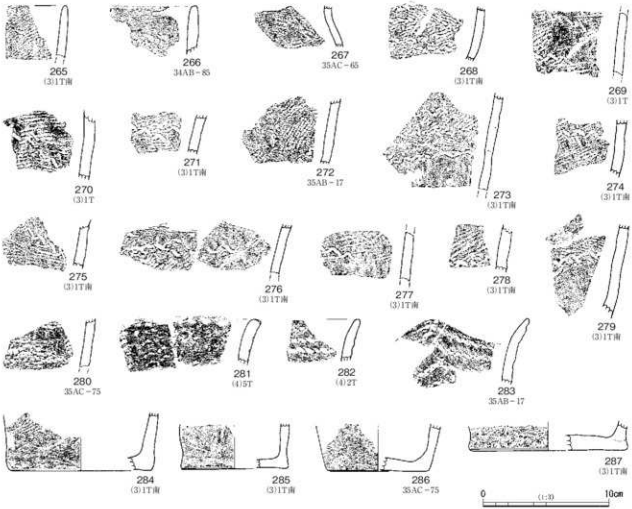
第14図　(3)・(4)出土縄文土器７

帯を設け、その下位から胴部にかけて縦方向に間隔を開けて沈線が垂下している。238は横方向の条線がみられ、239は細い沈線が格子状に施されている。240・241は真っ直ぐに立ち上がり口縁部が折り返し口縁となる深鉢である。240の口唇部は角頭状で上面に刻み目が付き、折り返し口縁の下端部にも間隔を開けて刻みを施こしている。口縁部から胴部にかけて左下がりの細沈線が引かれる。241は口唇部から右下がりの細沈線が伸びる。242は口唇部に押捺が認められ、口縁部は折り返し口縁となる。口縁部から右下がりの沈線がみられる。243は折り返し口縁に縦方向の沈線を施し、下端部に沈線を１条引いて三角形状の刻みを加えている。244の折り返し口縁は無文で、下端に刺突が連続する。245は口唇部に連続した押捺が加えられ、小刻みな波状口縁をなす。246～255は沈線文のみ認められる深鉢の胴部破片である。246～253は単独の沈線で鋸歯状や格子状を描いている。254・255は２条単位の平行する細い沈線で曲線文を施している。

256～第16図283は各種の原体による縄文が施された深鉢である。256～261・263は折り返し口縁状の口縁部を持つ深鉢である。256は外傾して開き、口縁部に数段の輪積痕跡を残し、縄文を施しているが磨滅気味で一部は消えている。257は結節を持つ縄文が口縁部に施文されている。258・259は口縁部に単節の縄文を施し、258は口唇部上面にも施文され、259の口唇部上面には浅い押捺が加えられている。260の口唇部は不明で、口縁部は折り返し口縁状を呈する。261は胴部から口縁部にかけて直線的に外傾しながら立ち上がる深鉢で、口径は25.0cm内外になるだろう。輪積痕跡を意識的に残すことによって口縁部は折り返し口縁状にみえる。全体に結節を持つ縄文を横方向に施文している。また、一部分に斜方向の沈線が不規則に引かれている。内面はナデによって仕上げられているが、平滑な状態はみられない。262は小さく



第15図　(3)･(4)出土縄文土器８



第16図　(3)･(4)出土縄文土器９

内彎する口縁部を作り、口唇部に連続的な押捺をやや深めに加えている。口縁部から胴部にかけて縄文を施している。263・264の口縁部も縄文が認められる。265・266は折り返し口縁状にはならない。ほぼ真っ直ぐに立ち上がり、265は結節ある縄文を施文し、266は無文である。267は胴部から口縁部への移行部分であろう。一度内傾して口縁部が上方に立ち上がっていく。縄文が施文される。268～280は深鉢の胴部で、いずれも結節のある縄文を横方向に回転させ施文している。281は口縁部が緩やかに外反し、口唇部に押捺を加えている。口縁部の装飾は貝殻腹縁を押しているようにみえるが、施文具は判然としない。282・283は縄文原体の圧痕文が口縁部に平行して施されている。282は平縁で283は波状口縁である。

284～287はこの時期の深鉢底部である。284は下端付近まで縄文がみられ、その下位は横方向にケズリ状の調整が行われている。285・286も同様に横方向への調整が認められる。285・287の下端部は外方に張り出して安定感がある。以上は前期後半から末葉に位置づけられる。

第３群　中期の土器（第17図、図版12・13）

本群は大別した４群の中で8.4％であり、重量は2,524ｇにすぎない。分布状況をみると、(4)の北西部と南東部にややまとまりが認められる程度である。

第17図288は同一個体と考えられる破片から器形を復元した。部位が不足し接合しないため器高は推定

である。底部の下端は張り出し、胴部は緩やかに外反しながら立ち上がってキャリパー形の口縁部に続き、口縁部には突起が付く。口唇部直下に縄文を施し、キャリパー形に膨らんだ部分は、地文に縄文を施文し、平行沈線や刺突、沈線による曲線が描かれる。口縁部の下位には刻みを加えた隆帯を貼り付ける。胴部は結節文を伴う縄文を縦方向に施す。外面の色調は灰褐色や暗黄褐色である。内面は平行する２条の稜が周回する。内面の色調も灰褐色や暗黄褐色を呈し、胎土に雲母の細粒が認められる。289は外傾しながら立ち上がる胴部の破片である。２点の破片に接点はないが同一個体と考えられる。結節をもつ縄文を施しているが、結節文部分を残して縄文をナデによって消している。装飾は沈線による曲線文や、斜方向の平行沈線が認められる。内面調整はナデが主体である。この288、289は五領ケ台式土器である。291の底部は下端部に張り出しは作られないが、この時期の深鉢の底部と考えられる。

290、292～296は阿玉台式土器である。290は、隆帯によって枠状の区画を形成し、隆帯に沿った押引文が認められる。隆帯上には刻目が加えられる。292・293は胴部の小破片で、２列の有節線文を横方向に施している。294・295はヒダ状圧痕様の装飾を認める。296は深鉢の底部で、底径が14cmとなる。底部付近までヒダ状圧痕が認められ、その下位は丁寧なミガキを施す。胎土に雲母の細粒を含み、２mm～３mmの石英粒が目立っている。

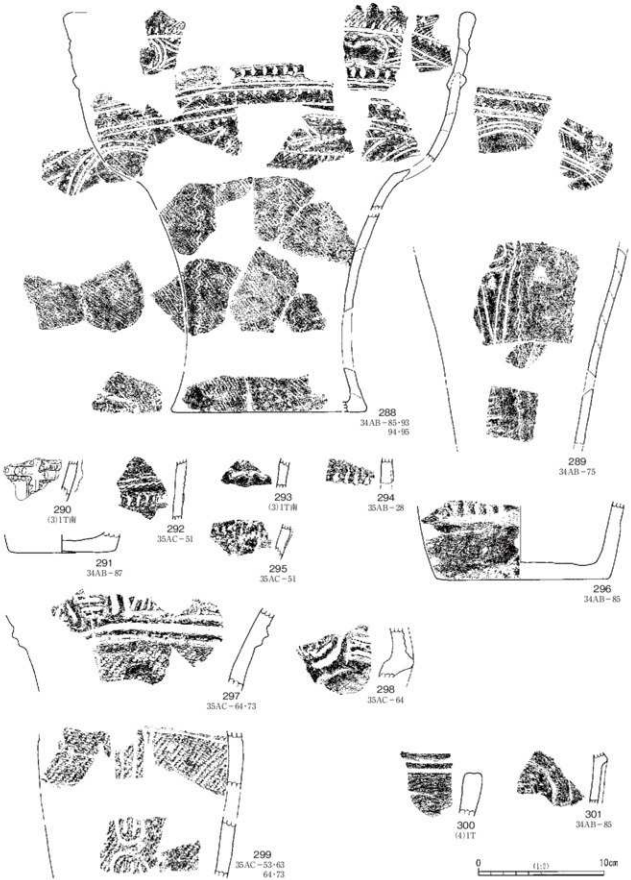
297～301は加曽利Ｅ式土器である。297～299は同一個体であろう。全体の器形を推測すると、キャリパー形の深鉢と考えられる。297は口縁部の一部で、２本１対の隆帯によるクランク状の意匠が配され、隆帯間を沈線で埋めていたとみられる。口縁部と胴部との境界には、２本の隆帯を周回させている。胴部の上部に沈線が横方向に回り、Ｕ字状の沈線を上下に対抗させ、さらにその中に２本の沈線を加えている。胎土は雲母粒や石英粒が多く含まれる特徴がみられる。加曽利ＥⅠ式である。300は上記の時期と同時期の浅鉢の口縁部であろう。口唇部上面に凹線が認められる。301は胴部に微隆起で曲線を描いている。加曽利ＥⅣ式になろう。

第４群　後期・晩期の土器（第18図302～第19図384、図版13・14）

本節の冒頭で述べたように、胴部の破片で後期と晩期が分けられないものがあったため、二者を区分しないで重量を計測して集計を行った。重量は4,327ｇで全体の14.4％になる。分布状況をみると、(3)の南隅にややまとまりが認められ、ほかは特に集中する状況ではなく、(4)にかけて散在する状況で出土している。

第18図302～310は後期の土器である。302は２本の沈線によって描かれた意匠の中に縄文を施文している称名寺式土器である。303～306は堀之内式土器である。303は波状口縁の波頂部から沈線が垂下している。304は口縁部直下の胴部で、沈線が斜方向に引かれ、305は縄文を地文に沈線が施されている胴部である。306は口縁部と胴部の境に隆帯が廻り、縦方向の８字状貼り付け文の一部がみられる。308は口縁部に把手が付いた小型土器と考えられる308は波状口縁の一部である。口唇部外面に刻みが付けられ、その直下に沈線を伴い、内面には稜が認められる。加曽利Ｂ式土器である。309はやや内彎する深鉢の口縁部で瘤が貼り付けられている。310は弧状に囲んだ沈線の内側に縄文が施文されている。この２点は安行１式になろう。

第18図311～第19図384は晩期の土器である。311・312は小型深鉢の同一個体である。口縁部に低い突起を持ち、突起内面に縦方向の沈線を施す。内外面とも黒色を呈し内面はミガキによって調整が行われてい

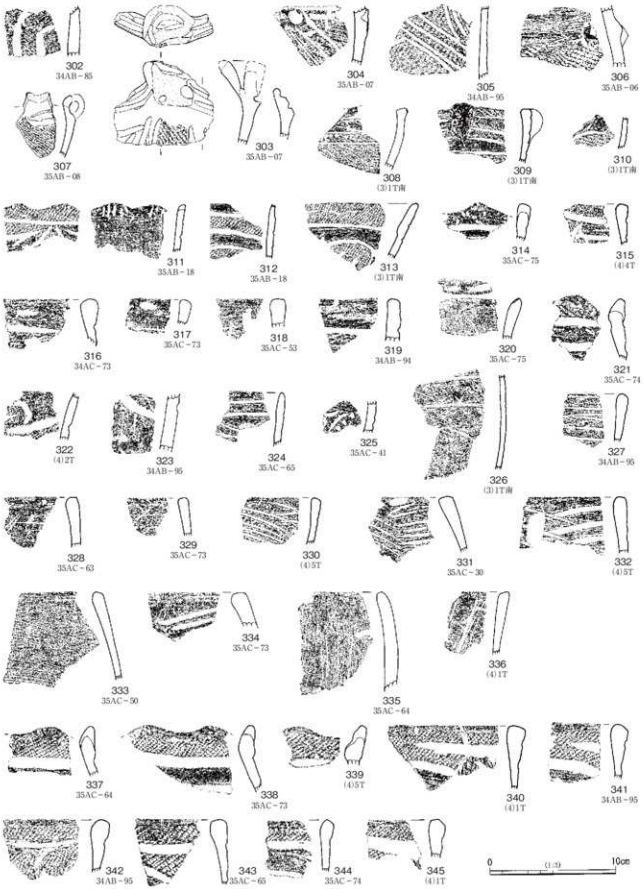


第17図　(3)・(4)出土縄文土器10

る。313は口縁部が外方に傾斜して開いており、浅鉢形と推測される。内面に段状の稜が存在する。安行3b式土器になろうか。314～321は口縁部が無文になるものである。口唇部が肥厚し314・321には小突起が付いている。320の口唇部内側は浅い押捺が認められる。以上は安行3c・3d式土器とみられる。322・323は胴部の破片である。322は沈線による入組文と縄文の施文がわずかに残存する。323は曲線を描く沈線が認められる。324は波状口縁の可能性がある。口縁部に沿って２本の沈線が引かれ、その下位に弧状の沈線が施されている。325は弧状の沈線に列点が伴う胴部の小破片である。326は沈線による枠状文と推測される２本の浅い沈線がみられる胴部上位の破片である。327～336はいわゆる粗製深鉢の口縁部である。

337～370は前浦式土器である。337～339は口縁部が内傾する深鉢と考えられる。口縁部に緩やかな山状の突起を設け、口唇部は肥厚している。口縁部直下に太い沈線が引かれ、その下位にミガキの無文部が認められる。339の口唇部の内側に凹線が存在する。340～348は平縁の深鉢口縁部である。口縁部は直立かやや内彎して立ち上がり、口唇部は肥厚し、そこに縄文を施している。340・341は同一個体で、口縁部に入組文が展開していたと推測される。349～353の口縁部は内傾するものが多い。波状口縁とした352以外は、おそらく平縁になるだろう。354～356は口縁部がわずかに内彎して立ち上がる深鉢である。いずれも口縁部の一部になるが、太めの沈線で舟形の枠状文を描いていたと考えられる。沈線の内側には縄文を施文していない。357・358は直立気味に口縁部が立ち上がる深鉢になる。横方向の沈線の下は入組文になろうか。359～363は浅鉢の口縁部である。359～362は外傾しながら開き、緩やかな波状口縁を呈する。内面に２条の凹線がみられ、362・363には１条のみ残存する。364～370は深鉢や浅鉢の破片である。364は口縁部から胴部への移行部になる。365は浅鉢の屈曲部で三叉文が彫刻的な手法で施され、帯縄文が突出してみえるような効果を出している。366～368は口縁部直下の一部であろう。369はやや深めの鉢と推測される。370は鉢の底部に近い部分である。以上に挙げた前浦式土器の縄文原体は、すべてLRが使用されている。また、内面の調整は横方向のミガキである。

371～384は晩期後半の土器で、371～376は浮線網状文系土器の精製浅鉢である。371は体部から口縁部にかけて開きながら立ち上がり、口唇部の内側に浅い凹線を持つ。口縁部は無文で細い２条の隆帯の中間に刺突を施し、体部は隆帯と沈線で囲んだ内側に縄文を施文している。372・373は口縁部が内側に屈曲内傾する浅鉢である。メガネ状浮線文、刺突によって体部の文様が描かれる。372の表面は磨滅している。374はわずかに内彎しながら立ち上がる浅鉢である。口縁部に縄文を施文し、体部にかけては沈線によって細い平行する浮線文を作出している。375・376は口縁部や体部にメガネ状浮線文を施している。377～381は撚糸文を施す粗製土器の口縁部である。いずれも折り返し口縁を持つ深鉢になろう。377・378の折り返しは目立たないが、380・381は明瞭な折り返しが行われている。382は鉢形、383は小型土器の口縁部である。384は浅鉢の底部である。



第18図　(3)・(4)出土縄文土器11

第19図　(3)・(4)出土縄文土器12

２　(5)出土縄文土器（第20・21図、図版15・16）

すでに(5)の周辺については、1,533㎡を対象に調査が実施されており、その際に未調査区として残っていた280㎡を対象に(5)として調査を実施した。前回の調査では、早期～晩期にわたる土器が出土し、特に撚糸文系土器と晩期の前浦式土器や千網式土器の割合が高かった。しかし、今回の範囲は前回の18％程度のため、出土総量はわずかで、総重量で4,400ｇにすぎない。既報告では撚糸文系土器の点数が最も多いという結果が得られていた。また、晩期の中では千網式土器の出土量が目を引いていた。今回は周辺と同様に撚糸文系土器が最も多く出土しているが、前期や後晩期の土器はわずかしか出土していない。

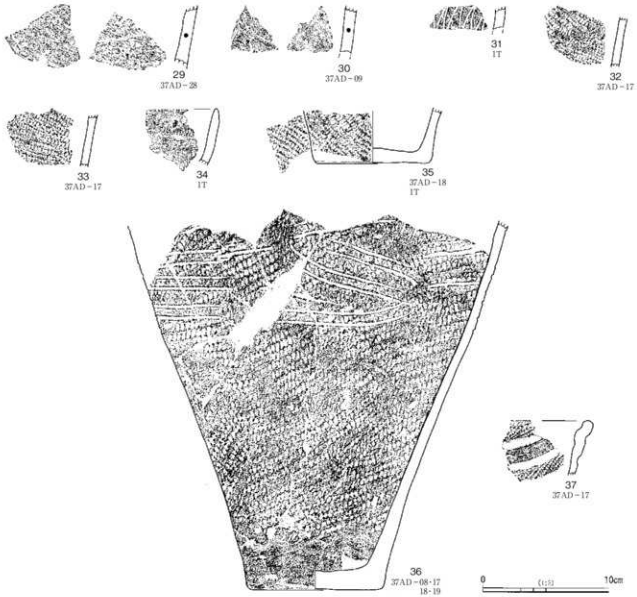
第20図１～23は撚糸文系土器で、小破片が出土している。１～９は井草式土器の口縁部である。１～５は口唇部が外反し肥厚し、１の口唇部には縄文を施文し、口唇部直下に指頭による押捺を施している。２は口唇部直下が無文である。指頭の痕跡は確認できない。この２点の内面は横方向の調整が行われている。３・４は口唇部の直下が横方向のナデにより無文となる。４の口縁部は外方に屈曲し、口唇部の下から縄文を施し、その後に横方向のナデで縄文を消している。３には補修孔が存在する。表側からの片側穿孔で、孔の周辺は磨かれたかのような状態になっており、これは紐がとおされていたための結果と考えられる。５～７の口唇部は断面が三角形状に肥厚し、口唇部直下から施文が行われている。８・９の口唇部の肥厚の度合いは弱い。10～12は夏島式土器である。いずれも外反の度合いは弱く、口縁部から胴部に向かって施文が行われる。12には焼成前に穿たれた縦方向にやや長い楕円形の小孔が存在する。孔の長径は５mm程度である。穿孔後に手を加えた状況は無く、遺存部にはこの１か所が確認できるのみで、ほかに小孔が存在したかは明らかにできない。13は稲荷台式土器である。口唇部は肥厚しているが施文が無く、その直下もまた無文となる。条間隔が狭いので夏島式土器というべきかもしれないが、口縁部の状況から稲荷台式土器にした。14～22は胴部～底部近辺の破片になる。14はやや膨らんだ胴部中位から底部への移行部分である。21・22は底部に近い部分である。上部側には縄文の施文を認めるが、その下位は鮮明でなくなる。23は砲弾形の底部で、器厚が17mm以上となり、胴部の厚さと比較するとかなり厚く作られる。一部に縄文の施文が認められ、底部の中心部からみて同心円状の調整が施されている。

24～28は撚糸文系土器終盤の無文土器である。24は口縁部がわずかに外反し、胴部から底部に向かって緩やかにすぼまっていく。底部は遺存しないが、おそらく砲弾形になると推測される。口径19.8cm内外、残存器高22.0cmになる。外面の調整は口縁部に横方向に擦痕状の調整痕が認められ、胴部以下には縦方向の調整痕が残り、全体に装飾的な要素は見当たらない。内面も同様に擦痕状の調整が行われている。口縁部に補修孔と考えられる孔が１対存在する。この孔は表面からの片側から穿たれており、孔壁が磨られた状態にみえる。胎土に砂粒が含まれ色調は茶褐色である。25は緩やかに外反する口縁部であり、口唇部は自然な丸みを持っている。外内面とも砂粒が横方向に動いており、擦痕状の調整が明瞭である。また、内面の下端部からは縦方向の調整が始まっている。26～28は胴部破片である。いずれも縦方向に施した擦痕状の調整が認められる。

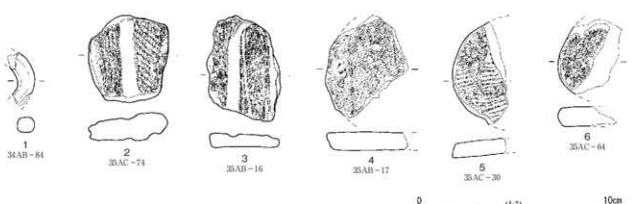
第21図29・30は条痕文系土器の胴部である。胎土に繊維をわずかに含み、調整痕はナデ状、擦痕状であり装飾は持たない。

31～35は前期後葉から末にかけての土器である。31は波状貝殻文を施した浮島式土器の胴部破片である。放射肋を持たない貝殻腹縁で鋭く描いている。32～35は前期末の土器と考えられる。32は結節縄文を持ち、33・35は単節の縄文が施文されている。35は底部の下端まで縄文が施文される。34はこの時期の無文土器

第20図　(5)出土縄文土器１



第21図　(5)出土縄文土器２



第22図　(3)～(5)出土土製品

である。

36は堀之内式土器の深鉢である。地文に縄文を施し、２本単位の沈線で曲線文や平行線文を描いている。残存器高は30.0cmである。37は縄文と太めの沈線が施された前浦式土器である。浅鉢の口縁部と考えられ、口縁部の内面に凹線が認められる。

3　縄文時代の土製品（第22図、図版16）

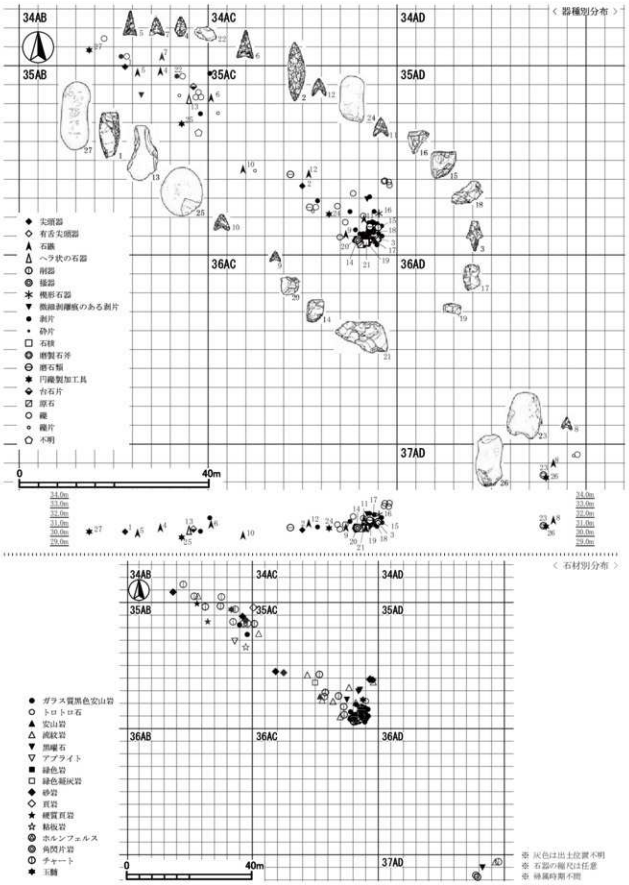
１は棒状に伸ばした粘土紐をリング状に曲げて焼成した土製品と推測され、その一部の遺存と考えられる。玦状耳飾りの欠損品ともみられるが、品名は不明である。２・３は晩期の土器片の周辺に調整を施し、何らかの目的で再利用を計画したものと思われる。未成品の状態で終わっていると考えられ、品名は明らかではない。４は底部破片を、５・６は胴部の破片に調整を施し円板状にしている。いずれも欠損品である。

4　縄文石器（第23図～第25図、図版17）

今回の(3)～(5)では、縄文時代早期の土器が遺跡全体から満遍なく出土し、前期・中期・後晩期の土器は局所的に分布する傾向が認められる。石器は有舌尖頭器や石鏃など、草創期に特徴的な資料が多く出土した。しかし、草創期の遺構や土器は検出しておらず、石器出土時期の明確な判断材料に欠ける。そのため、これまで研究されてきた主に刺突具の形態変化・地域的な石器編年などを手掛かりにした。特に3・9・11・14～21が出土したトレンチ１、トレンチ１南は35ACグリッドの南東端に位置し、石器と土器が高密度に分布する。遺物の多くはローム層上面からⅡｂ層に包含され、表土一括採集資料も少なくない。遺物が包含される層位からは有舌尖頭器・石鏃・掻器・削器・微細剥離痕のある剥片・剥片（調整剥片、砕片含む）・石核・磨石類・原石・礫・礫片が出土しているが、示準となる石器は有舌尖頭器と草創期の石鏃のみで、縄文時代のどの時期に帰属するのか特定するのは難しく、このうちの幾片かは旧石器時代に帰属する可能性も否めない。

縄文時代の石器は104点を数え、そのうち27点をここで報告する。器種組成は尖頭器２点、有舌尖頭器１点、石鏃９点、ヘラ状の石器１点、掻器１点、削器１点、楔形石器１点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片・砕片45点、石核１点、磨製石斧１点、敲石、磨石、台石及びそれらの小片を含む円礫製加工具類は８点である。剥片の中には尖頭器などの調整剥片・砕片が26点含まれ、18～20の３点を図示した。

第24図１・２は尖頭器である。１は石刃を素材とした周縁加工の尖頭器である。周縁からの加工には器面の中ほどに及ぶ剥離もみられ、減厚を意識した成形痕と考えられる。上下はガジリによる欠損であるが、主要剥離面側の上端に打面直下で形成されるような庇状の張り出しがみられることから打点はごく近くにあった可能性があり、剥片剥離の際の折損かと思われる。淡褐色で滑らかな器面であり、剥離面・新鮮面とも光沢をもつ。下部のガジリ（新鮮面）は緑灰色～褐色を帯び、この硬質頁岩本来の色みが感じられる。２は左右非対称の尖頭器である。直線状の左側縁に対して右側縁は弧状を成し、両面ともに縁辺からの成形・整形により非対称ながら両尖の精美な形状に設えている。いわゆる縄文時代草創期後半にみられる「半月形石器」（橋本2015・2016a）であるが、その多くが厚みのない硬質頁岩、あるいは神津島産の黒曜石であるのに対し、当該資料には薄緑色で細粒の緑色凝灰岩が用いられている。厚さは最大で8.56mmであり、最大値のある中央部分は取り切れていない。正面右下半部及び裏面上部には成形時に器厚を減じ切れていない部分が階段状に残っており、裏面中央のやや上方には素材時の古い剥離面が認められる。



第23図　(3)～(5)石器出土分布

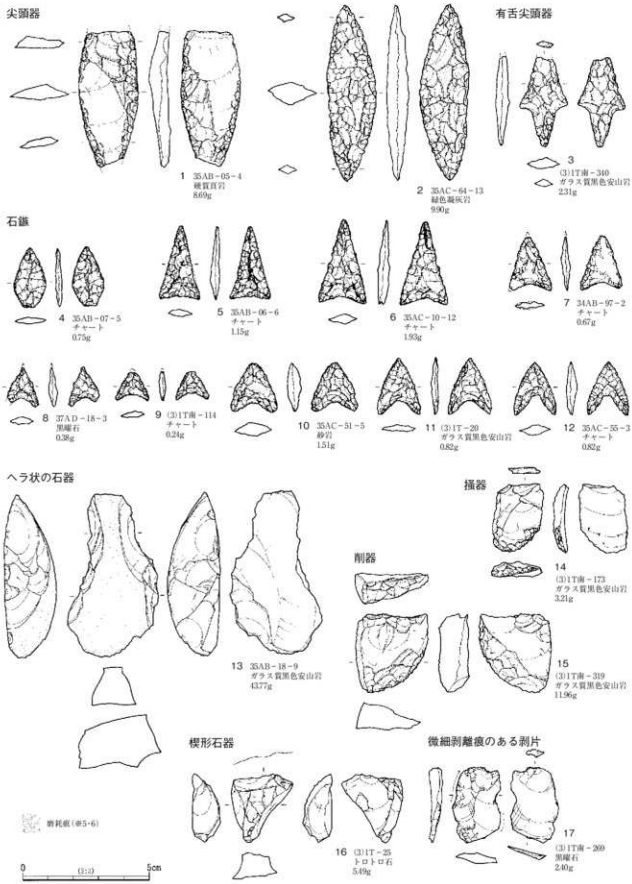
３は有舌尖頭器である。先端部は欠損するが、推定される器長の1/3以上の長く太い舌部を有する。両側縁はカエシに向かって角度を変えるため、全体の形状は各角部が突出し、尖鋭な菱形となる。有舌尖頭器が多出した近在の遺跡では、当遺跡から南南西1.8kmの距離にある多古町一鍬田甚兵衛山南遺跡（(財)千葉県文化財センター 2005）があり、安山岩やホルンフェルスをはじめチャート・流紋岩・砂岩・頁岩など多様な石材で作り出されている。しかし、本資料のように側縁が反り返るような形状の尖頭器は確認できなかった。鎌ケ谷市五本松遺跡（(財) 千葉県文化財センター 1989）の表土中から採集された例は形状が近似している。有舌尖頭器の中でもより新しい段階に帰属するということである（鈴木1986、落合2001）。

４～12は完形及び完形に近い石鏃であり、出土した９点すべてを図化した。未成品や大きく破損したものはなく、器厚の薄い資料が多い中、製作時の形状を保った状態での出土は稀なことである。４～11は草創期～早期前半、12は早期前半以降に特徴的な形態・石材である。

４は厚みの少ない五角形で濃い灰色のチャート製である。縁辺から丁寧に加撃された剥離痕は中央部まで到達するが器厚の薄さからか、明確な背稜とはならず、より薄く平らな印象を与える。早期前半の撚糸文期に出土する五角形鏃で、花輪台型五角形鏃（及川2003）と呼称される形態である。５は整った形状の二等辺三角形で、わずかに内湾するがほぼ直線状の基部をもつ。稜上及び右脚端部は磨耗し、鈍い光沢がある。濃灰色のチャート製である。６は５と相似形で本資料の方が一回り大きい。両側縁は直線状で先端角は35°、シャープな印象の二等辺三角形であり、基部の抉りは弱い。正面下部の稜は磨耗し、部分的に光沢を放つ。最大厚は器中央にあるがこの部分に磨耗痕はなく、減厚を意図する局部磨製石鏃とは趣を異にする。石材は、薄緑を帯びた灰色を基調とし、黒色の脈が密に入るチャートである。５・６は４の花輪台型五角形鏃と同時期の所産である。

７は二等辺三角形で、「へ」の字状の弱い抉りをもつ厚みのない石鏃である。先端と左脚部の先がわずかに欠損する。裏面全体に丸みのある小さな凹みが多数みられ、小豆色に変色していることから、被熱による剥落痕と推定される。本来の色は緑灰色のチャートである。８は 片脚部欠損した小型凹基の五角形鏃で、いわゆる先端突出形である。突出部は上部先端のみに留まらず、右側縁中央部にも１か所、尖鋭な突起が作られている。先端部は折損しているが、推定ラインは直上へと平行に延びており、針状の尖端部が存在した可能性をうかがわせる。糞状の白斑が入る灰白色半透明のごく良質な黒曜石製であり、光沢が強い。肉眼観察では信州冷山産と思われる。９は小型で上端部が欠損しているが、全体の形状は整った正三角形である。脚部の抉りは弧状で、浅く広い。脚先はわずかに内向する。緑がかった灰色で、部分的に濃灰色を含むチャート製である。草創期から早期にかけて出土する小型正三角形鏃である。10は厚みのある正三角形で正面中央部に素材面が残る。基部の抉りは緩い。側縁は各端部付近で内側に角度を変えており、全体的にころりとした丸みが感じられる。平面形は正三角形で基部は平ら、もしくは浅く抉れ、在地の石材が利用される石鏃は縄文時代草創期後半～早期にみられ、しばしば五角形鏃とともに出土する(及川2003、橋本2016b)。基調は濃灰色の砂岩製で右側縁と基部には褐色に変色した部分がみられる。11はわずかに丸みが感じられる精緻なつくりの二等辺三角形で、先端はさらに細く作り出される。薄い剥片を素材とし、稜の高みはほとんど感じられない。両側縁は微細な剥離痕によって鋸歯状となっており、手指に引っかかる感がある。ごく小さな斑晶が入るガラス質黒色安山岩製である。

12は凹基二等辺三角形の石鏃である。両側縁はごく弱いが緩やかな弧を描き、基部は台形状に深く抉れ



第24図　(3)～(5)出土縄文石器１

る。先端部、脚先ともに向勢の側縁が収束し、尖鋭な端部を形成する。斜平行剥離による精緻な加工により正面は逆Ｙ字状、裏面は逆Ｕ字状の稜線が浮かび上がる。側縁に擦り調整はなく、細かな鋸歯状である。石材は深緑色を帯びた濃灰色を基調とするが、右脚部先端は小豆色の２トーンのチャート製である。その形態と石材から、早期前半～前期に帰属する可能性が高い。丸みのある形状で抉りが深く、類例は柏市矢船Ⅰ遺跡（(公財）千葉県教育振興財団 2017）のK15-63グリッドからも出土している。

13はヘラ状の石器である。Ⅱｂ層から出土した貝殻状の剥片剥離痕をもつ資料で、石核とも捉えられようが、長軸を縦位に設置し上部を握部、下部を掻・削部とするヘラ状の石器として報告する。拳大ほどの大型の横長剥片が素材であり、主要剥離面側から背面の自然面へ向けて急角度の剥離が施される。全体の形状は裾広がりの撥型であり、下部は半円弧状に残される。この弧状の縁辺に明確な加工痕や使用痕は認められないが、部分的に摩耗による丸みが感じられる。なお、13を中心とした半径５ｍ内には草創期の石鏃や台石片、前期の側面調整礫などが出土している。同様な器種・石材分布状況を示す遺跡として、流山市十太夫第Ⅲ遺跡（(公財）千葉県教育振興財団 2015）の（1)SX002礫集中が挙げられる。

14は掻器である。縦長の剥片の末端部には主要剥離面側からの急角度加工がみられ、素材の厚みに応じた調整痕が施されている。上部の折れは意図的なものか否かは不明であり、折れたのちの加工痕は見受けられない。

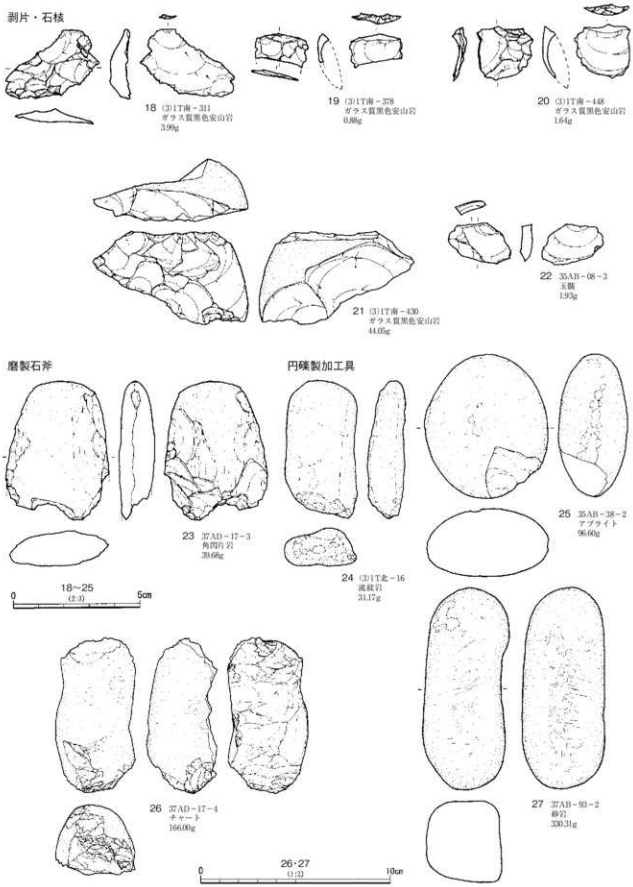
15は削器である。打角138°という鈍角の打面ゆえ、背面側の上部には鋭角な縁辺があったものと推察できる。当初は刃器として利用した可能性があるが、その縁辺は直線状に加工され、右端部は突出する。また、右下縁辺は背腹両面から45°～55°に調整され、素材の厚みを利用した弧状の刃部が作出される。自然面・剥離面とも黄褐色のローム粒をまとったガラス質黒色安山岩製である。なお、情報量の多い主要剥離面側を正面として図化した。

16は上下方向から加えられた力により、左右に折れが生じた楔形石器である。石材の特徴と相まって稜があまく、明確な加工痕や使用痕は捉えられない。トロトロ石と分類したが一般的なトロトロ石よりも硬質で磁性が弱い。

17は微細剥離痕のある剥片である。背面に主要剥離と同一方向の剥離痕が少なくとも４枚あり、微細剥離痕は左上部と右下部にみられる。末端は背面側へと回り込み、器端部から上方へと向かう左側面の剥離痕は主要剥離面に切られる。青みのある濃灰色で半透明の細い筋が重なる良質な黒曜石で、淡褐色の斑晶が小量混じる。縄文時代前期の土器とともに出土した。

18～20は調整剥片である。打角、背面構成、同じ石器集中地点から出土した複数の類似する資料などから、尖頭器などの調整剥片と推定される。18の剥離軸は石核側に向かって捩れ、内包する割れを取り込んでいる。厚みのない縁辺は凹凸のあるフィッシャーによってギザギザとした鋸歯状となるが、人為的な痕跡はない。比較的大型の尖頭器調整剥片である。19の背面は、方向を同じくする多くの剥離面で構成され、打面と主要剥離面との間は強く張り出し庇を形成する。下部は折れにより遺存しない。20の打点直下では庇が形成され、庇に沿った楕円形のリップがみられる。一旦背面側に深く湾曲し、末端部は鋭いフェザーエンドである。背面には多方向・大小様々な薄い剥離痕がみられる。

21は石核である。原石の大きさは拳大ほどか。作業面から剥離された剥片は厚みの少ない貝殻状、もしくは横長剥片と推定されるが接合する資料はない。すべて裏面を打面として器厚を削ぐように剥離される。石材はガラス質黒色安山岩である。



第25図　(3)～(5)出土縄文石器２

22は剥片である。打面は背面側から生じた折れにより遺存しない。縁辺はほぼ全周に亘って折れやガジリにより欠損している。剥離軸を横位に設定し縦長に据え、打面部の折れを意図的な基部成形と見なせば、Ⅴ層～Ⅳ層段階の玉髄製ナイフ形石器と捉えられようが、表採資料であり、風化・欠損著しく、時期や正確な器種は特定できない。

23は磨製石斧である。刃部は折損し、裏面の器表面は発達した節理も相まって階段状に剥がれている。器厚や遺存する側縁の形状から推定される破損前の大きさは６cm内外と思われるが、欠損や剥落した器面を繰り返し研磨などで整えた跡が観察でき、製品本来の大きさは８cm以上と考えられる。薄茶色で脆弱な質感の脈や、黒色で光沢のある結晶が入る角閃片岩製で磁性が強い。

24～27は円礫製加工具である。磨石、敲石、台石など、複数の機能を備えた資料の総称とした。24は、厚み約1.5cm前後の角柱状で、赤く被熱したのちに黒色の水溶液に浸したような変色痕がみられる。下部の平坦面は斜めに摩耗しており所々剥落している。端部には微弱な敲打、あるいは押し引きによる弱い潰れ痕が白く残る。25の小型円礫の正面・側面に擦痕がみられるが、器形を変えるほどではなく、被熱してうっすらと褐色を帯びた器表面に白いザラつきと薄い剥落を与える程度である。右斜め下の剥離痕は敲打の際に弾けたものである。縄文時代前期に多出する「側面調整礫」に類するものと思われる。26は縦位に分割された厚みのある礫の両端部に、敲打痕と剥離痕をもつ。平坦面及び側面に点・筋状の使用痕が残っていることから、円礫の状態では台石や敲石として利用されていたことがわかる。また使用時の割れが内包されたことで脆くなり、縦折れの要因となった可能性がある。自然面・剥離面とも黒みが強いが、ところどころ滑らかな淡褐色部分がのぞくチャート製である。27の平面形は長楕円、横断面形は隅丸正方形であり、上下両端を除いた４面は平坦面で構成される。各平坦面には弱い擦痕が縦横に走るが局所的であり、器面の荒れを調整するための摩耗痕と思われる。器表面は概ね滑らかだが左上部の赤みのある部分は薄く剥落している。石材は白色半透明の砂粒が多く含まれる砂岩である。

引用参考文献

落合章雄 2001「尖頭器石器群の技術形態学的検討」『研究紀要22』（財）千葉県文化財センター

及川　稔 2003「出現期石鏃の型式変遷と地域的展開　－中部高地における黒曜石利用の視点から－」『黒曜石文化研究』第２号　明治大学人文科学研究所

（公財）千葉県教育振興財団 2015『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書７　－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中鳥遺跡（上層）・市野谷向山遺跡（上層）・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第Ⅰ遺跡（上層）・十太夫第Ⅰ遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－』

（公財）千葉県教育振興財団 2017『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書11　－柏市花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・館林Ⅱ遺跡・寺下前遺跡・八反目台遺跡-縄文時代以降編－』

（財）千葉県文化財センター 1989　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅸ　－五本松遺跡－』

（財）千葉県文化財センター 2005「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XXI　－多古町一鍬田甚兵衛山南遺跡（空港№12遺跡）－」

鈴木道之助 1986「新東京国際空港№12遺跡の有舌尖頭器をめぐって」『研究紀要』10（財）千葉県文化財センター

橋本勝雄 2015「移行期の半月形石器と両面加工石器群　－茨城県大洗町一本松遺跡出土の資料から－」『茨城県考古学協会誌』第27号　茨城県考古学協会

橋本勝雄 2016a「縄文草創期後半の両面加工石器群　－東日本における東北頁岩製石器群と神津島産黒曜石製石器群の対比－」『千葉縄文研究６』千葉縄文研究会

橋本勝雄 2016b「関東・中部における石鏃の出現とその系譜　－縄文草創期から縄文早期前半まで－」『茨城県考古学協会誌』第28号　茨城県考古学協会

第３表　一坪田入Ⅱ遺跡出土石器集計表

石材＼器種	尖頭器	有茎尖頭器	石鏃	へう状石器	削器	掻器	楔形石器	衝撃剥離痕のある剥片	剥片	砕片	石核	磨製石斧	磨石類	磨石類片	円礫製加工具	台石片	原石	礫	礫片	不明	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩		1	1	1	1	1			33	1	1										40	38.83%	147.00	9.82%
トロトロ石							1			1											2	1.94%	5.55	0.37%
安山岩														1							1	0.97%	30.79	2.06%
流紋岩													1		1			5	3		10	9.71%	215.37	14.39%
黒曜石			1					2	6												9	8.74%	7.80	0.52%
アプライト															1						1	0.97%	96.60	6.45%
緑色岩									1												1	0.97%	9.86	0.66%
緑色凝灰岩	1																				1	0.97%	9.90	0.66%
砂岩			1										1		1	1		4	1		9	8.74%	492.05	32.87%
頁岩									1												1	0.97%	2.67	0.18%
硬質頁岩	1							1													2	1.94%	9.11	0.61%
粘板岩																				1	1	0.97%	4.28	0.29%
ホルンフェルス																			1		1	0.97%	44.25	2.96%
角閃片岩												1									1	0.97%	39.68	2.65%
チャート			6						2						1		1	10	1		21	20.39%	375.84	25.11%
玉髄									2												2	1.94%	6.22	0.42%
合計	2	1	9	1	1	1	1	3	45	2	1	1	2	1	4	1	1	19	6	1	103	100.00%	1496.97	100.00%

第４表　一坪田入Ⅱ遺跡出土石器属性表

番号	挿図	図版	調査次数	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
1	24	17	(4)	35AB-05	4	尖頭器	硬質頁岩	53.56	23.19	7.67	8.69	周縁加工
2	24	17	(4)	35AC-64	13	尖頭器	緑色凝灰岩	69.03	18.87	8.56	9.90	草創期平刃形石器　磁性無し
3	24	17	(3)	1T南	340	有舌尖頭器	ガラス質黒色安山岩	35.51	19.52	5.80	2.31	端部欠損
4	24	17	(4)	35AB-07	5	石鏃	チャート	23.33	12.73	2.90	0.75	撚糸文期花輪台型石鏃五角形
5	24	17	(4)	35AB-06	6	石鏃	チャート	28.81	17.93	3.80	1.15	撚糸文期花輪台型石鏃
6	24	17	(4)	35AC-10	12	石鏃	チャート	33.59	18.58	4.85	1.93	
7	24	17	(4)	34AB-97	2	石鏃	チャート	22.06	16.88	3.03	0.67	被熱剥落
8	24	17	(5)	37AD-18	3	石鏃	黒曜石	15.75	11.76	3.80	0.38	片脚端欠損
9	24	17	(3)	1T南	114	石鏃	チャート	12.12	13.04	2.20	0.24	端部欠損
10	24	17	(4)	35AC-51	5	石鏃	砂岩	19.26	18.47	5.46	1.51	
11	24	17	(3)	1T	20	石鏃	ガラス質黒色安山岩	21.98	16.87	3.41	0.82	
12	24	17	(4)	35AC-55	3	石鏃	チャート	20.48	16.86	3.81	0.82	
13	24	17	(4)	35AB-18	9	ヘラ状の石器	ガラス質黒色安山岩	64.41	37.12	20.74	43.77	角錐状石器未成品か
14	24	17	(3)	1T南	173	掻器	ガラス質黒色安山岩	28.26	19.17	5.73	3.21	
15	24	17	(3)	1T南	319	削器	ガラス質黒色安山岩	32.05	28.61	11.93	11.96	
16	24	17	(3)	1T	25	楔形石器	トロトロ石	25.42	24.34	11.80	5.49	
17	24	17	(3)	1T南	269	剥片	黒曜石	30.15	20.78	5.18	2.40	微細剥離痕あり
18	25	17	(3)	1T南	311	剥片	ガラス質黒色安山岩	29.68	36.07	7.83	3.99	ポイントフレーク
19	25	17	(3)	1T南	378	剥片	ガラス質黒色安山岩	11.80	21.01	4.52	0.88	ポイントフレーク
20	25	17	(3)	1T南	448	剥片	ガラス質黒色安山岩	21.20	21.60	5.05	1.64	ポイントフレーク
21	25	17	(3)	1T南	430	石核	ガラス質黒色安山岩	37.67	61.08	23.39	44.05	
22	25	17	(4)	35AB-08	3	剥片	玉髄	17.37	24.04	4.83	1.93	ナイフか
23	25	17	(5)	37AD-17	3	磨製石斧	角閃片岩	53.34	41.92	13.16	39.68	基部（上部）磁性あり
24	25	17	(3)	1T北	16	円礫製加工具	流紋岩	53.07	28.61	15.51	31.17	薄い角柱状　赤・黒色凝布　端部摩耗
25	25	17	(4)	35AB-38	2	円礫製加工具	アプライト	55.59	49.03	27.67	96.60	半花崗岩 前期の側面調整礫か
26	25	17	(5)	37AD-17	4	円礫製加工具	チャート	80.83	41.28	37.38	166.00	破損後最石に転用
27	25	17	(4)	34AB-93	2	円礫製加工具	砂岩	105.60	44.23	44.15	330.31	磨石
28			(3)	1T	13	礫	流紋岩	25.68	20.33	9.61	4.62	
29			(3)	1T	19	剥片	玉髄	30.75	19.62	9.21	4.29	光透過
30			(3)	1T	26	剥片	黒曜石	12.62	17.24	2.86	0.44	
31			(3)	1T北	14	剥片	黒曜石	19.50	28.61	8.22	2.63	
32			(3)	1T北	15	剥片	黒曜石	4.81	13.86	1.63	0.08	未注記　微細剥離痕あり
33			(3)	1T北	23	礫	流紋岩	29.50	23.16	16.59	11.47	
34			(3)	1T北	29	礫	チャート	31.91	16.56	12.58	10.61	
35			(3)	1T南	112	剥片	緑色岩	34.60	41.26	7.22	9.86	ドレライト?
36			(3)	1T南	113	磨石類	砂岩	46.72	38.16	19.13	42.07	
37			(3)	1T南	115	礫	流紋岩	24.10	26.53	6.69	6.50	
38			(3)	1T南	170	剥片	ガラス質黒色安山岩	13.53	16.13	2.76	0.63	ポイントフレーク
39			(3)	1T南	171	礫片	ホルンフェルス	54.43	32.52	28.87	44.25	赤化
40			(3)	1T南	234	礫	チャート	17.61	13.55	11.15	3.02	尖頭器基部か
41			—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
42			(3)	1T南	236	剥片	ガラス質黒色安山岩	23.77	20.85	5.53	2.51	ポイントフレーク
43			(3)	1T南	250	剥片	ガラス質黒色安山岩	15.48	24.24	5.26	1.64	
44			(3)	1T南	257	礫	チャート	38.83	22.15	14.90	15.04	赤化
45			(3)	1T南	279	礫	チャート	41.69	25.56	11.94	13.43	
46			(3)	1T南	286	剥片	ガラス質黒色安山岩	16.57	27.97	4.27	1.75	ポイントフレーク
47			(3)	1T南	312	剥片	ガラス質黒色安山岩	20.48	27.80	6.09	2.36	
48			(3)	1T南	313	剥片	黒曜石	15.71	13.18	2.27	0.33	
49			(3)	1T南	314	剥片	ガラス質黒色安山岩	19.42	24.94	3.84	1.49	ポイントフレーク
50			(3)	1T南	315	剥片	黒曜石	15.94	11.03	2.47	0.26	
51			(3)	1T南	316	剥片	ガラス質黒色安山岩	9.05	15.16	4.40	0.47	ポイントフレーク
52			(3)	1T南	317	剥片	ガラス質黒色安山岩	20.81	24.77	6.15	2.63	
53			(3)	1T南	318	剥片	ガラス質黒色安山岩	9.50	13.62	3.74	0.56	ポイントフレーク

番号	挿図	図版	調査次数	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
54			(3)	1T南	321	剥片	黒曜石	15.65	13.68	2.60	0.44	微か
55			(3)	1T南	331	砕片	トロトロ石	6.72	6.87	1.31	0.06	未注記
56			(3)	1T南	337	剥片	ガラス質黒色安山岩	8.37	14.50	3.59	0.26	ポイントフレーク
57			(3)	1T南	338	剥片	ガラス質黒色安山岩	18.01	30.56	3.90	1.56	ポイントフレーク
58			(3)	1T南	339	剥片	ガラス質黒色安山岩	18.27	10.74	3.03	0.60	ポイントフレーク
59			(3)	1T南	345	剥片	ガラス質黒色安山岩	15.36	21.26	3.82	1.14	
60			(3)	1T南	346	剥片	ガラス質黒色安山岩	21.62	12.13	4.36	0.64	ポイントフレーク
61			(3)	1T南	350	剥片	ガラス質黒色安山岩	12.30	12.25	2.81	0.37	ポイントフレーク
62			(3)	1T南	351	剥片	ガラス質黒色安山岩	7.70	12.52	1.64	0.14	ポイントフレーク
63			(3)	1T南	352	剥片	ガラス質黒色安山岩	30.45	19.17	4.90	3.02	
64			(3)	1T南	375	剥片	ガラス質黒色安山岩	11.67	11.22	2.71	0.38	ポイントフレーク
65			(3)	1T南	377	剥片	ガラス質黒色安山岩	17.25	20.79	4.88	1.28	ポイントフレーク
66			(3)	1T南	379	剥片	黒曜石	13.38	11.46	6.66	0.84	ナイフ基部か
67			(3)	1T南	407	砕片	ガラス質黒色安山岩	8.58	6.26	1.34	0.08	ポイントフレーク
68			(3)	1T南	409	剥片	ガラス質黒色安山岩	20.03	16.40	6.81	2.17	
69			(3)	1T南	410	原石	チャート	57.36	30.01	18.90	47.69	
70			(3)	1T南	411	剥片	ガラス質黒色安山岩	12.72	17.32	3.49	0.67	ポイントフレーク
71			(3)	1T南	420	剥片	ガラス質黒色安山岩	17.09	20.63	5.42	1.28	ポイントフレーク
72			(3)	1T南	427	剥片	ガラス質黒色安山岩	14.37	18.08	3.56	0.65	ポイントフレーク
73			(3)	1T南	428	剥片	ガラス質黒色安山岩	14.89	7.57	2.80	0.20	ポイントフレーク
74			(3)	1T南	429	剥片	ガラス質黒色安山岩	16.07	13.03	3.49	0.74	ポイントフレーク
75			(3)	1T南	431	剥片	ガラス質黒色安山岩	10.81	14.71	3.90	0.35	ポイントフレーク
76			(3)	1T南	441	剥片	ガラス質黒色安山岩	11.64	12.76	1.56	0.21	ポイントフレーク
77			(3)	1T南	443	剥片	ガラス質黒色安山岩	12.92	30.87	5.67	1.93	加工痕なし
78			(3)	1T南	444	剥片	ガラス質黒色安山岩	20.19	13.40	2.19	0.44	ポイントフレーク
79			(3)	2T	1	礫	流紋岩	32.01	23.08	10.82	6.29	
80			(3)	2T	2	礫	砂岩	37.87	24.63	17.31	20.59	
81			(3)	2T	3	礫	砂岩	34.40	15.69	14.39	11.52	
82			(3)	2T	4	礫	砂岩	34.66	22.59	15.80	14.21	
83			(4)	34AB-84	1	礫	チャート	15.74	15.67	8.17	3.52	
84			(4)	34AB-95	1	剥片	チャート	26.55	25.65	4.73	3.68	
85			(4)	34AB-95	2	礫	流紋岩	27.26	18.48	12.39	5.99	被熱　赤化
86			(4)	35AB-08	2	礫	チャート	23.45	17.77	7.37	3.08	
87			(4)	35AB-16	2	剥片	硬質頁岩	10.37	13.96	3.65	0.42	微細剥離痕あり
88			(4)	35AB-18	2	礫片	チャート	11.77	10.48	9.60	1.40	
89			(4)	35AB-19	1	礫	砂岩	22.73	16.02	12.45	4.65	被熱　赤化
90			(4)	35AB-19	1	礫	チャート	16.50	15.66	9.01	2.66	
91			(4)	35AB-19	1	礫	チャート	17.86	12.85	11.09	2.50	
92			(4)	35AB-19	8	台石片	砂岩	63.08	41.10	17.44	57.22	
93			(4)	35AB-29	8	剥片	ガラス質黒色安山岩	29.80	19.99	5.43	2.22	
94			(4)	35AB-39	1	不明	粘板岩	28.88	27.53	3.36	4.28	
95			(4)	35AC-00	2	剥片	頁岩	16.11	24.66	7.76	2.67	
96			(4)	35AC-20	1	礫片	流紋岩	19.79	14.91	8.92	2.24	
97			(4)	35AC-52	2	礫片	砂岩	24.21	23.36	19.82	9.97	
98			(4)	35AC-54	7	磨石類	流紋岩	64.94	52.26	29.44	137.75	被熱　1/2遺存
99			(4)	35AC-75	1	磨石類片	安山岩	44.93	52.98	13.32	30.79	被熱　表皮剥落片
100			(4)	35AC-75	1	礫	チャート	70.92	41.62	21.30	89.49	赤化
101			(4)	35AC-75	1	礫片	流紋岩	23.41	17.17	11.66	5.31	赤化
102			(4)	35AC-75	3	剥片	チャート	38.15	26.77	8.15	6.47	
103			(5)	1T	1	礫	チャート	19.95	11.13	5.99	1.69	
104			(5)	1T	1	礫片	流紋岩	23.54	12.51	10.51	4.03	

第３章　五反田栗島遺跡(1)

第１節　遺跡の概要

五反田栗島遺跡は、香取郡多古町五反田字栗島91ほかに所在する。調査区から西に辿って行くと高谷川を望み、東側からは多古橋川によって刻まれた谷が西に向かって入り込み、遺跡の南北を刻んでいる。したがって、遺跡は平坦部がほとんど認められず、特に調査区範囲は、東側の狭小な平坦面と西側に認められる平坦部とを繋ぐような尾根状となる範囲で、全体に北西と南東に下って谷部へと続いていく。また、調査前は山林で樹木が密集する状況がみられた。

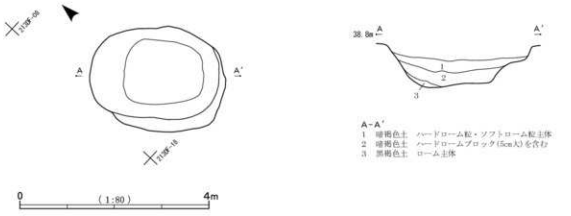
ここでは、平成29年度に実施した対象面積2,413㎡の成果を報告する。調査区割およびトレンチ配置は第27図のとおりである。中央部では尾根状地形に沿うようにトレンチを配置し、わずかな平坦部が広がる西側では、遺物の包含範囲が捉えられるように設定した。対象範囲を大グリッド表記で記すと、212DF、212DG、213DF、213DGとなる。

トレンチ調査の結果、調査区の北東側は立川ロームが確認されず、南西側の狭い範囲から遺物が出土した。トレンチの周辺を拡張して遺構の検出に努めたが、遺構は土坑１基を検出したにとどまった。また、下層についても、確認調査を行った結果、遺構・遺物は検出されなかったことから、上層・下層とも確認調査の範囲で調査を終了した。

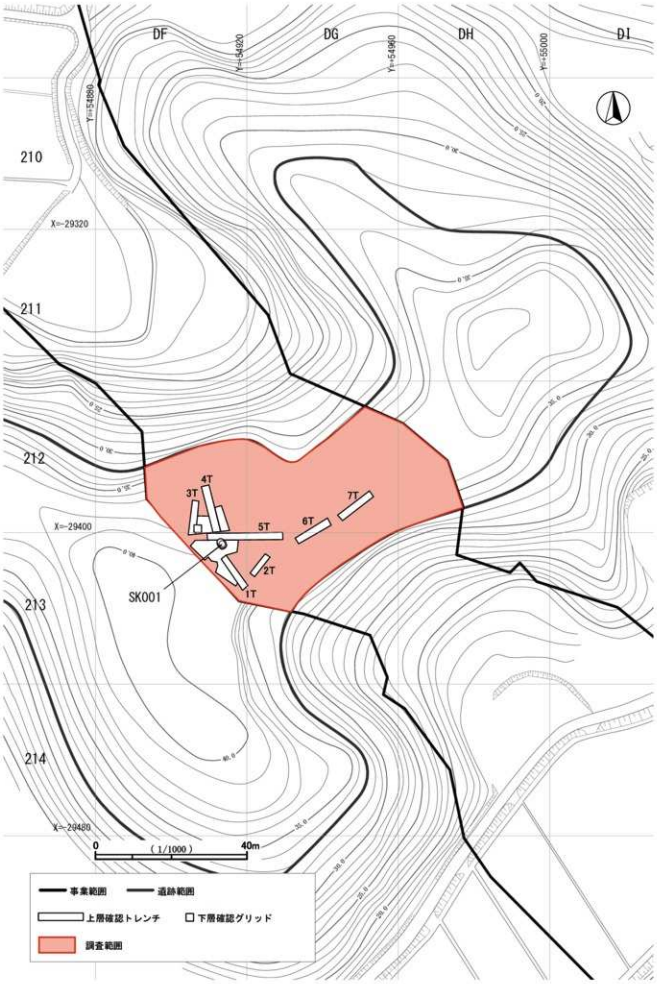
第２節　検出遺構と遺物

１　検出した遺構（第26図、図版19）

ここでの唯一の遺構であるSK001は、213DF-08グリッドに位置する。調査区の最も西寄りの地域で検出され、周辺からは後述するような縄文土器が出土している。緩やかな斜面から西側にある平坦部への移行部で、検出面での立川ローム層は確認できない。土坑は隅丸長方形か楕円形に近い平面形を呈する。長軸長2.85m、短軸長2.25m、確認面から底面までの深さは0.94mである。長軸方位はN-45°-Eを指す。底面は隅丸長方形となり北西にむかって傾斜しているが、底面にピットなどは存在しない。長軸方向の北西側で緩やかに傾斜しながら立ち上がり、南東側では途中に段が付いている。この段が土坑の掘り直しによるものか、直接関わるものかは判断できない。また、遺物が出土していないため、時期の決定はできない。



第26図　SK001



第27図　遺跡の地形と調査区割

２　出土した遺物

出土遺物は、縄文土器、土製品、石器、古墳時代以降の土器類と江戸時代の銭貨があり、いずれも調査区の南西側から出土している。

縄文土器（第28図～第33図）

縄文土器は、前期、中期、後期が出土している。ここでは、以下のように４群に分類することとする。

第１群　前期前半の土器

第２群　前期後半の土器

第３群　中期の土器

第４群　後期の土器

第１群　前期前半の土器（第28図１～30、図版20）

本群に比定した土器は黒浜式土器である。１・２は口縁部が平縁と推測される深鉢で、やや開きながら立ち上がると考えられ、単節の斜行縄文を施文する。３は深鉢の口縁部である。平縁と推定したが、緩やかな波状口縁の可能性も考えられる。全体に斜行縄文を施文する。４は平縁でわずかに口縁部が開いて立ち上がり、少しくびれ部をつくり胴部に続く。鉢になると考えられる。口唇部は角頭状を呈し、全体に無節の縄文を施文する。胎土に繊維は目立たない。５は平縁の口縁部で焼成後に穿たれた孔が存在する。補修孔であろう。全体に撚りが緩い無節の縄文を施す。６は口縁部直下の深鉢胴部である。破片上部に沈線を施した痕跡があり、その下位には単節の縄文を施文する。裏面に繊維が抜けてくぼみ状となったか所が存在する。７～15は深鉢の胴部である。いずれも縄文を施す。16はやや内彎して立ち上がる深鉢の口縁部である。縄文を施しその上に弧状に沈線を施す。17は小さな突起を付けた深鉢口縁部で、少し内彎する。口縁部に半截竹管の内側を使って施文した３段の刺突文があり、その下位に縄文を施す。

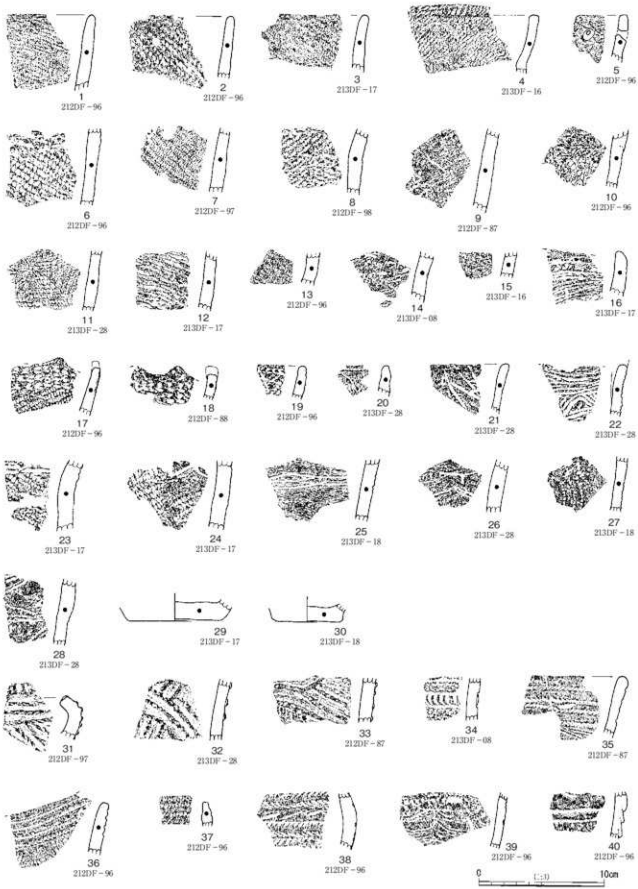
18は間隔を開けずに２個１対の小突起が付く口縁部である。わずかに内彎気味になるとみられる。口唇部直下ら半截竹管による刺突を多段に施す。19は口唇部直下に有節線文を施す。20は小さく波状となる口縁部をもつと考えられる。口唇部直下に平行線文を引き、口縁部に附加条縄文を施文するとみられるが、遺存部がわずかなため不明である。21の口縁部は沈線を斜方向に引き、雑な格子状に施文する。胎土に繊維のほか砂を多く含む。22は口縁部が広がるように開き波状口縁を呈する深鉢になろう。口縁部に沿って平行沈線を施し、その下位に斜方向に沈線を引いており、構成は諸磯式に近い23はくびれ部から胴部にかけての破片である。くびれ部に平行沈線を引き、その下位に縄文を施文する。25・26は縄文を地文に平行沈線を施す。27は貝殻腹縁を多段に押捺する深鉢の胴部である。

29・30は底部である。平底で底面に編物の痕跡は認められない。30の底部下端は外方にやや張り出している。

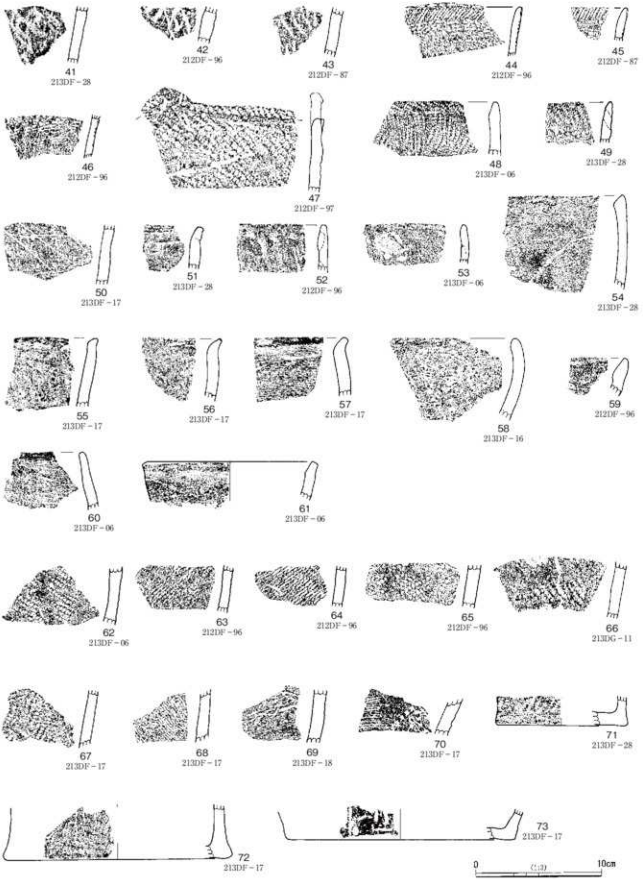
第２群　前期後半の土器（第28図31～第29図73、図版20・21）

本群に比定した土器は諸磯式土器・浮島式土器～前期末の土器である。

31～34は諸磯ｂ式土器である。31はキャリパー形を対する口縁部で内側に内彎する。32・33は口縁部下位から胴部にかけての破片である。いずれも刻みが付いた浮線文を施す。34は縄文を地文にして爪形文が


1
212DF－96
2
212DF－96
3
213DF－17
4
213DF－16
5
212DF－96
6
212DF－96
7
212DF－97
8
212DF－98
9
212DF－87
10
212DF－96
11
213DF－28
12
213DF－17
13
212DF－96
14
213DF－08
15
213DF－16
16
213DF－17
17
212DF－96
18
212DF－88
19
212DF－96
20
213DF－28
21
213DF－28
22
213DF－28
23
213DF－17
24
213DF－17
25
213DF－18
26
213DF－28
27
213DF－18
28
213DF－28
29
213DF－17
30
213DF－18
31
212DF－97
32
213DF－28
33
212DF－87
34
213DF－08
35
212DF－87
36
212DF－96
37
212DF－96
38
212DF－96
39
212DF－96
40
212DF－96
0
1:10
10cm

第28図　縄文土器１


41
213DF－28
42
212DF－96
43
212DF－87
44
212DF－96
45
212DF－87
46
212DF－96
47
212DF－97
48
213DF－06
49
213DF－28
50
213DF－17
51
213DF－28
52
212DF－96
53
213DF－06
54
213DF－28
55
213DF－17
56
213DF－17
57
213DF－17
58
213DF－16
59
212DF－96
60
213DF－06
61
213DF－06
62
213DF－06
63
212DF－96
64
212DF－96
65
212DF－96
66
213DG－11
67
213DF－17
68
213DF－17
69
213DF－18
70
213DF－17
71
213DF－28
72
213DF－17
73
213DF－17
0
10cm

第29図　縄文土器２

横方向に付く。35～37は浮島式土器の口縁部である。35・37は平縁になると推測され、36は波状口縁を呈する。両者とも口縁部に沿うように変形爪形文を施す。37の口唇部上面には浅い刻みが伴う。38はやや幅広の変形爪形文が３条平行する。ただ、２条が上下に近接し１条がそれらと少し間隔を置いて施文する。39は胴部下半部になろう。平行する有節線文の下位に沈線がみられる。40は口縁部直下で、結土紐の輪積痕を残して装飾としている。41～43は波状貝殻文を施している胴部である。器面が磨滅気味で施文が浅い状態である。44～46は興津式土器である。44・45は平縁になる深鉢の口縁部になるだろう。口唇部直下にやや右上がりとなる条線が密に配され、胴部にかけて貝殻腹縁による刺突文が横位に展開する。

47～61は前期末に比定した。47～49は口縁部に縄文を施す深鉢である。47は小突起が付き、口唇部にも縄文を施す。小突起の右側に輪積痕が残る。内面は横方向にミガキが行われる。48は内面に稜を持ち、全体にミガキを施す。49は直立する平縁の口縁部で、内面に弱い稜がみられる。50はヘラ先状工具による沈線を斜方向に引き、部分的に格子状になる。

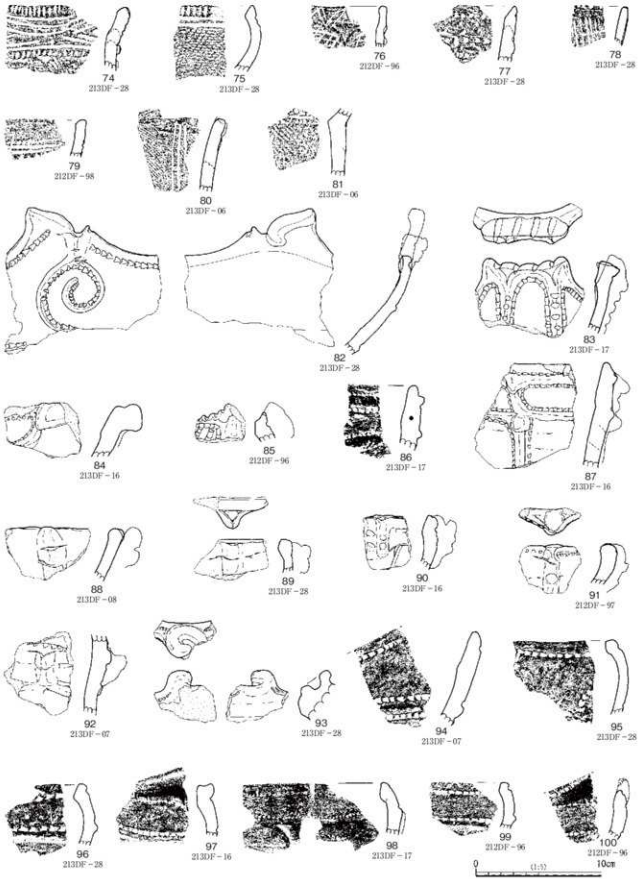
51～61は無文の土器で、58が浅鉢の可能性があるが、ほかは平縁の深鉢である。51は口縁部の外面に輪積痕を残し、一方52・53は内面に輪積痕が認められる。54～57・61は内面の口唇部に稜が存在し、内削状を呈する。外面調整はいずれもナデによる。胎土はやや砂質である。59の内面には浅い凹線が横走する。60の外面は横方向の砂粒の流れが確認され、内面はミガキで仕上げている。58は浅鉢である。体部全体がわずかに内彎して立ちあがり、口唇部の内側に深鉢と同様稜が付く。胎土は砂質で焼成がやや不良である。以上の小型無文土器を前期末に考えたが、型式名について比定できない。中期初頭の五領ケ台式の口唇部内面に稜が付く部類も存在するので、中期初頭の可能性も高いが、胎土や調整の方向などから一応前期末とする。

62～70は胴部破片である。69は胴部下位で、結節状文が横位に施文されている。71～73は底部になる。いずれも下端部が外方に張り出している。

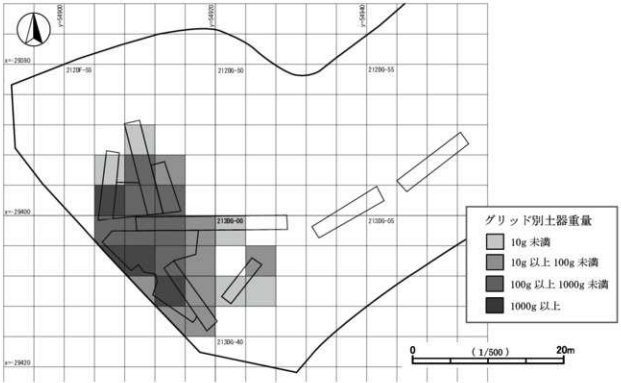
第３群　中期の土器（第30図74～第33図143、図版21～図版23）

74～79は五領ヶ台式土器の口縁部になろう。74は波状口縁を呈する深鉢で、口縁部上端部に縦方向に連続する沈線を施し、口縁部は沈線と三角形状の刺突で構成され、その下位に隆帯が横方向とＶ字状に付き、その隆帯上に刻み目を施す。胎土に石英の細粒のほか雲母が認められる。75はキャリパー形の口縁部である。上端部は直立して縦方向に沈線を施し、口縁部全体に縄文を施文する。上端部と縄文施文部は横方向の沈線で区画している。また、内面に稜が付く。76の口縁部には平行沈線による鋸歯状文が配され、その下位に隆帯による区画が行われ、区画内に沈線で格子状文を施す。77は直立気味に立ち上がり、内面に稜が存在する。口縁部には平行する有節線文が認められ、また、隆帯を付けた痕跡が残る。78は口唇部に刻みが付き、口縁部は縦方向に沈線を施す。79の口縁部は口縁部に平行する有節線文と沈線が引かれ、一部に三角形状の刺突が認められる。内面の口唇部には稜が認められる。80は小突起が付くと推測される口縁部であるが、小突起は欠損し形状は不明である。81は胴部の上位になろう。屈曲部に有節線文が周回すると推測され、胴部に縄文を施す。

82～136は阿玉台式土器である。82は４単位の波状口縁を持つ深鉢と考えられ、その波頂部の一つである。波頂部から右にやや下がった位置に押捺を加え、そこから短い隆帯が垂下する。隆帯の直下に低隆帯が渦巻状を描く。さらに口唇部や渦巻状の隆帯に沿って角押文を施す。胎土に雲母の細粒を認めるが、目立つ


74
213DF－28
75
213DF－28
76
212DF－96
77
213DF－28
78
213DF－28
79
212DF－98
80
213DF－06
81
213DF－06
82
213DF－28
83
213DF－17
84
213DF－16
85
212DF－96
86
213DF－17
87
213DF－16
88
213DF－08
89
213DF－28
90
213DF－16
91
212DF－97
92
213DF－07
93
213DF－28
94
213DF－07
95
213DF－28
96
213DF－28
97
213DF－16
98
213DF－17
99
212DF－96
100
212DF－96
0
(1:5)
10cm

第30図　縄文土器３



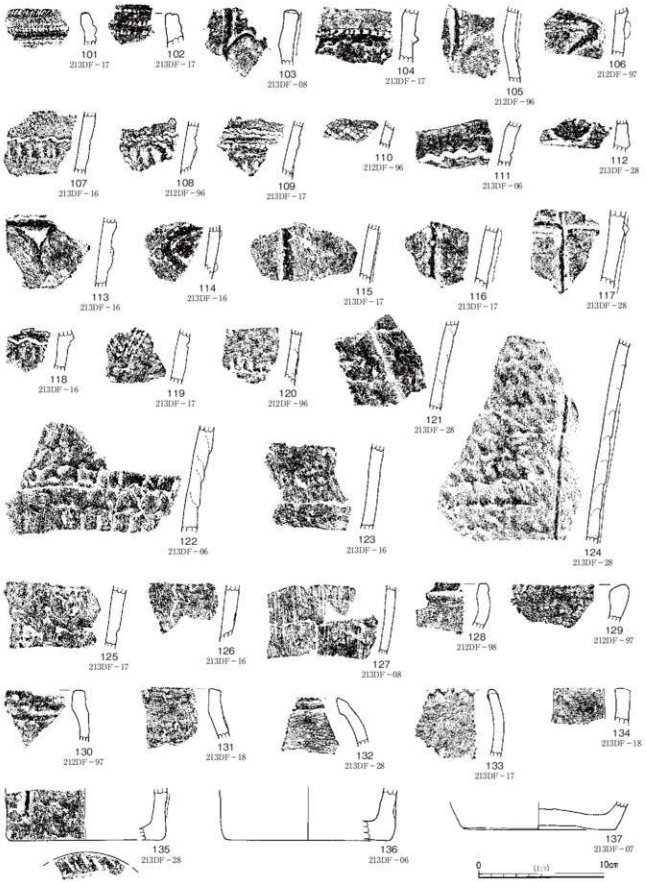
第31図　中期の土器分布

存在ではない。83は把手の口唇部に押捺がされ、同様な押捺が付いた２本の隆帯が垂下する。また、その隆帯に沿って角押文が伴う。84・86・87は同一個体で隆帯による区画に沿って角押文を施す。85は口縁部に付けた突起である。88～91は口縁部に縦方向に短い粘土紐を貼り付け、その上に粘土紐を２段に付けて成形し突起を作っている。92は突起を起点に枠状の隆帯を付ける。93は口唇部上面に角押文が認められ、渦巻状の隆帯が付く。94～102は口唇部直下に角押文を施文している。94は波状口縁を呈する。95～102はやや内彎気味の口縁部となる。98・99には口縁部に平行する角押文がみられる。102は口唇部と口唇部直下に角押文が認められる。103は波状口縁の一部である。口唇部に棒状工具による押捺を施し、口縁部に隆帯による曲線が存在する。101はわずかな遺存部から推測すると、波状口縁を呈していた可能性も考えられる。また、上記までの土器とは細別を異にする。口唇部に斜方向の刻みが並び、口縁部から隆帯の上に縄文を施している。雲母を多く含んでいる。

104～127は胴部の破片である。104～108は隆帯に沿う角押文がみられ、107～109にはヒダ状圧痕が付いている。110は角押文で111は沈線によって波状文が描かれている。112～119・124は隆帯が付けられる。115～117は縦方向に隆帯を貼り、119に角押文が118には波状の沈線が沿っている。120～127は胴部の中位から下位の破片で、120～125にはヒダ状圧痕がみられる。121・125は圧痕が浅く、粘土紐の接合痕が部分的に残る。126は垂下する蛇行沈線が認められる。127は胴部下位になり、縦方向の調整痕が認められる。

128～133は装飾を持たない口縁部である。128～132の口縁部内側には明瞭な稜が付き、133の口唇部上面は連続する押捺が認められる。134は突起部で、装飾は付かない。

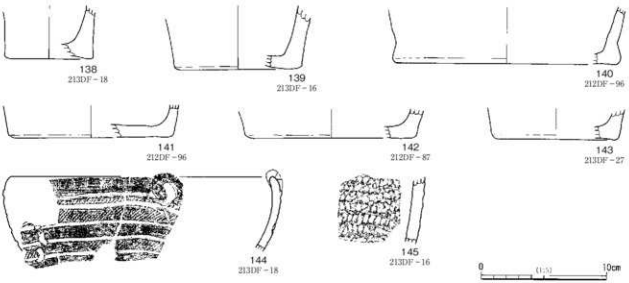
135～143は底部である。135の底面の周囲に作製時に敷いた編物の圧痕が存在する。また、垂下する隆帯が底部近くまで伸びており、ヒダ状圧痕も残る。136～143はいずれも底部の一部である。140の底部下端は外方に張り出している。


101
213DF－17
102
213DF－17
103
213DF－08
104
213DF－17
105
212DF－96
106
212DF－97
107
213DF－16
108
212DF－96
109
213DF－17
110
212DF－96
111
213DF－06
112
213DF－28
113
213DF－16
114
213DF－16
115
213DF－17
116
213DF－17
117
213DF－28
118
213DF－16
119
213DF－17
120
212DF－96
121
213DF－28
122
213DF－06
123
213DF－16
124
213DF－28
125
213DF－17
126
213DF－16
127
213DF－08
128
212DF－98
129
212DF－97
130
212DF－97
131
213DF－18
132
213DF－28
133
213DF－17
134
213DF－18
135
213DF－28
136
213DF－06
137
213DF－07
0
10cm

第32図　縄文土器4

第４群　後期の土器（第33図144・145、図版23）

少量の後期の土器が出土している。144は口縁部がわずかに内彎する鉢である。口縁部外面に１個の突起が残り、ミガキを施す。体部にかけては口縁部と平行する沈線が引かれ、縄文を施す部分とミガキを行う部分が分かれる。内面は装飾が存在せず、横方向の丁寧なミガキを施す。加曽利Ｂ１式である。145は粗製深鉢土器の胴部の一部と考えられる。



第33図　縄文土器５

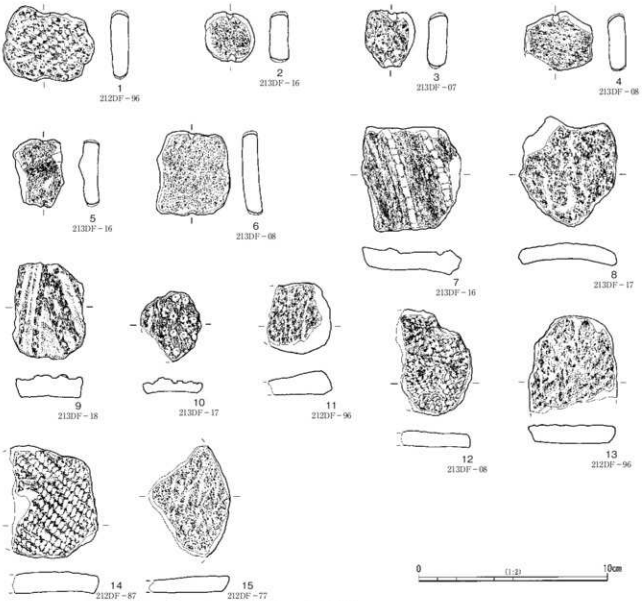
縄文時代の土製品（第34図、図版23）

土製品は、土器片錘と土器片の周囲に調整を施し円板状にした２種が出土している。１～６は土器片錘である。１は長方形に調整した土器片の短軸方向に紐かけの切込みを入れている。切込み部分は周縁よりも磨られた状態を呈する。黒浜式の土器片である。２・３は楕円形に調整し長軸方向に切込みを作り、４は短軸方向に作る。５・６は長軸方向である。２～６は前期末から中期の土器片を用いている。

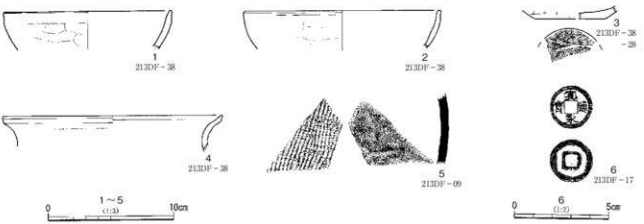
７～15は円板状土製品である。７・８は阿玉台式の土器片周辺に調整を施す。切込みを作出すれば土器片錘になるので、土器片錘の未成品とも考えられる。９～15は前期の土器に調整を施す。９は諸磯ｂ式土器、10～14は黒浜式土器に調整を施し、楕円形の円板に加工している。15はやや大形の土器片を用いている。大半が欠損しているが、全体の形状は円形であったと推測される。

古墳時代以降の遺物（第35図）

古墳時代以降では土師器・須恵器の破片と近世の銭貨が出土した。いずれも出土した点数はわずかで、保存状態は不良である。１・２は土師器の杯である。口縁部の外面は横方向のナデが行われ、体部は横方向を主体のヘラケズリを施す。内面調整はナデである。古墳時代後期の所産である。３は土師器の皿であろう。底面と底部下端をヘラケズリで調整する。４は小型甕の口縁部である。口唇部が上方に摘まみ上げられている。５は須恵器の甕の胴部破片で、内面がツルツルな状態になっている。転用していた可能性があるが、墨痕などの痕跡は残存しない。６は１点出土した銭貨で寛永通寶である。



第34図　土製品



第35図　古墳時代以降の遺物

第５表　五反田栗島遺跡出土土製品一覧

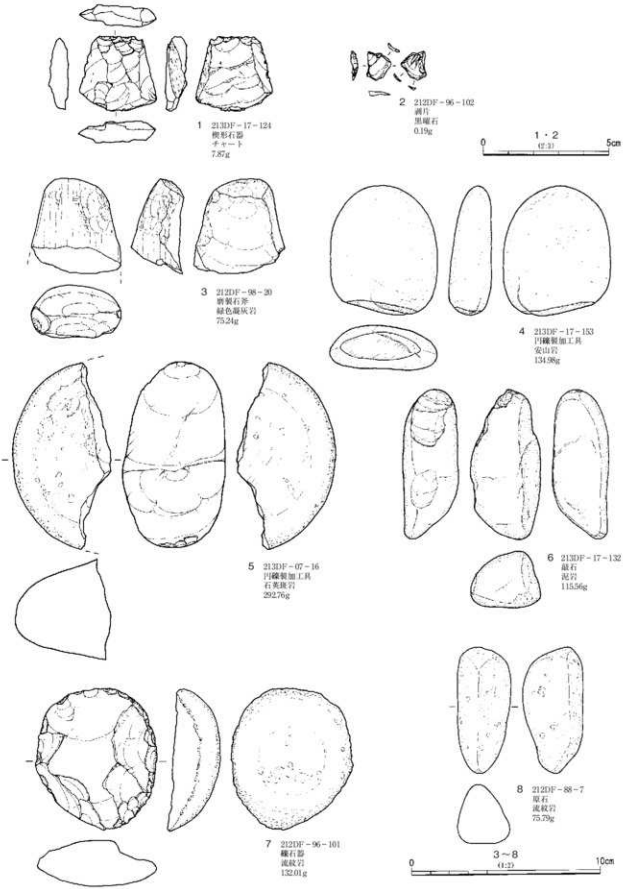
挿図	種類	出土地点	遺物番号	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備　　考
第35図 1	土器片錘	212DF-96	105	38.0	48.0	8.5	17.0	短軸方向に切込み
第35図 2	土器片錘	213DF-16	6	26.0	26.0	10.0	8.6	
第35図 3	土器片錘	213DF-07	15	30.0	25.5	10.0	9.8	
第35図 4	土器片錘	213DF-08	73	31.0	36.0	9.0	(11.9)	短軸方向に切込み
第35図 5	土器片錘	213DF-16	33	35.0	26.0	10.0	(9.8)	
第35図 6	土器片錘	213DF-08	45	44.0	37.4	9.0	19.2	
第35図 7	円板状	213DF-16	5	55.5	52.5	8.5	42.1	
第35図 8	円板状	213DF-17	22	58.5	52.0	8.5	28.7	
第35図 9	円板状	213DF-18	13	51.0	38.0	11.0	26.2	
第35図10	円板状	213DF-17	109	(37.0)	(32.0)	7.0	(7.1)	
第35図11	円板状	212DF-96	82	37.5	(33.5)	12.0	(14.7)	
第35図12	円板状	213DF-08	5	(56.0)	(37.5)	8.5	(18.3)	
第35図13	円板状	212DF-96	174	(51.5)	46.5	9.5	(23.6)	
第35図14	円板状	212DF-87	3	60.0	(45.0)	10.5	(33.4)	
第35図15	円板状	212DF-77	3	(59.0)	(43.0)	8.5	(20.8)	

縄文石器（第36図、図版24）

点数が少なく、個々の帰属時期は不明であるが、縄文時代の石器が出土している。１は楔形石器で、石鏃の素材と考えられる。形状は台形で左側縁に刃こぼれ状の欠けがみられる。濃灰色のチャート製である。２は黒曜石の剥片である。肉眼観察では神津島産と推定される。３は磨製石斧の基部で、使用時の衝撃で折れたと推測される。緑色凝灰岩製である。４は敲痕と擦痕が見られ、複数の機能を持った円礫製加工具である。安山岩製である。５は厚みのある盤状の円礫で、全体の２分の１弱が遺存する。遺存する平坦面には剥落と擦痕がみられる円礫製加工具である。石英斑岩製である。６はやや角張った楕円礫素材の敲石である。長軸の両端に使用痕が認められる。泥岩製である。７は球形の礫から剥離した表皮片を素材とし、周縁部を剥離と敲打で加工した削器である。周辺部は潰れて摩耗した状態を呈する。流紋岩製である。８は縦長の礫で、丸みのある三角錐状を呈する。加工痕や使用痕は認められないが、敲打具の素材として持ち込まれた原石であろう。流紋岩製である。

第６表　五反田栗島遺跡出土石器属性表

番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	重量g	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	備考
1	213DF-17	0124	楔形石器	チャート	7.87	30.00	30.04	8.51	石鏃の素材か
2	212DF-96	0102	剥片	黒曜石	0.19	11.36	9.52	3.02	神津島産(肉眼観察)
3	212DF-98	0020	磨製石斧	緑色凝灰岩	75.24	(50.42)	(47.51)	(26.93)	基部
4	213DF-17	0153	円礫製加工具	安山岩	134.98	67.81	56.47	23.14	
5	213DF-07	0016	円礫製加工具	石英斑岩	292.76	97.51	(53.82)	(54.52)	割れ面赤変色
6	213DF-17	0132	敲石	泥岩	115.56	80.00	36.75	30.01	端部敲打痕
7	212DF-96	0101	礫石器	流紋岩	132.01	74.97	64.22	27.53	球形礫の表皮片素材
8	212DF-88	0007	原石	流紋岩	75.79	66.48	28.58	31.93	三角柱状


1 213DF－17－124
楔形石器
チャート
7.87g
2 212DF－96－102
剥片
黒曜石
0.19g
1・2
(1:3)
0
5cm
3 212DF－98－20
磨製石斧
緑色凝灰岩
75.24g
4 213DF－17－153
円礫製加工具
安山岩
134.98g
5 213DF－07－16
円礫製加工具
石英斑岩
292.76g
6 213DF－17－132
敲石
泥岩
115.56g
7 212DF－96－101
礫石器
流紋岩
132.01g
8 212DF－88－7
原石
流紋岩
75.79g
3～8
(1:3)
0
10cm

第36図　縄文石器

第４章　まとめ

１　一坪田入Ⅱ遺跡(3)～(5)

今回調査を実施した地区は、一坪田入Ⅱ遺跡の全域からみれば西端部に当たる場所である。遺跡の中心地域は平坦さが確認できるが、西側は尾羽根川に向かって傾斜する河岸段丘となる斜面地である。本調査を実施した範囲は、その斜面地の最も尾羽根川寄りであり、そこから台地寄りは遺構や遺物が検出されないことが判明した。このようなことから、本来台地上に包含されていた遺物は、永年の様々な作用を受けて斜面部の端部まで流れ込んできたと推測される。したがって、遺物については、本来の地点や層位は反映されてはいない。そのような状況であるが、遺構や出土遺物は、本地域の地域性の一端を垣間見せている。

検出した遺構は陥穴１基である。陥穴の長軸の方向は等高線に直行する向きで単独で検出された。遺物が出土していないので断定はできないが撚糸文期の可能性がある。

遺物は縄文土器と土製品及び縄文石器である。縄文土器の主体は撚糸文系土器である。既報告の(1)･(2)の調査区の中心は、撚糸文系土器であった[1]。この前回の調査では、井草式土器の占める割合が高く、それに次いで夏島式土器という結果が示されている。ところが、(3)・(4)では、井草式土器は口縁部の破片から推定しても、夏島式土器の量を上回るとは考えらない。わずかな地点の違いで土器の割合が異なるという結果となった。夏島式土器に続く稲荷台式土器も量的に少なくなるが出土している。その中の２点(第10図138・139)の口縁部には、焼成前に穿たれた小孔が横に並んで存在する。また、(5)の夏島式土器の１点（第20図12）にも小孔が穿たれている。ここでの点数は計３点とわずかであるが、焼成前に穿たれた孔を持つ資料の類例については、峰村篤氏が集成を進めている[2]。それによれば、これまで千葉県を中心に19遺跡での出土が確認されており、時期的には井草式土器～稲荷原式土器に及ぶという。周辺では成田市東峰御幸畑西遺跡、吉倉白ヶ峰遺跡、大袋小谷津遺跡、畑ヶ田新林遺跡、木の根拓美遺跡を挙げられている。そこに一坪田入Ⅱ遺跡が加わり、当該土器の中心的な分布域であることが一層鮮明になってきたといえよう。撚糸文系土器の新しい段階では、１片のみであるが花輪台式土器や、(5)からは対の補修孔がある無文系土器の深鉢が出土している。また、早期については子母口式土器が出土しているものの、土器からはそれ以降継続する様相はとらえられない。

前期に至ると後半期の土器が出土し中期も前半期までの土器が散発的に出土している。そのような出土傾向が晩期前葉までみられる。前回の調査区からは前浦式土器、千網式土器、荒海式土器が出土するなど晩期末葉まで確認された。なかでも千網式土器の古段階の土器がややまとまって出土している[1]。隣接する(5)における千網式土器は顕著ではなく、(3)・(4)と前浦式土器が主体になっている。保存状態が不良で全体は明らかにならないが、浅鉢や深鉢が認められる。

石器は(3)の斜面から多くが出土し、密度は薄くなるが(4)にかけて出土している。(4)から出土した「半月形石器」[3]や花輪台型五角形鏃[4]と呼ばれる特徴的な石器が目を引いた。しかし、このような時期が限定される石器と土器は、ここでの在り方をみるかぎり相関関係を有しているとはいえない。

２　五反田栗島遺跡(1)

遺跡は東側の多古橋川と西側の高谷川に挟まれた地域に立地する。平坦面は遺跡の東西にわずかに広がり、調査を行った地区は東西の中間地で、尾根状もしくは陸橋状に狭まった部分である。確認調査では、構築時期が不明な土坑１基が検出されたほかは、遺物包含層のわずかな広がりが認められたにとどまる。

遺物は縄文土器、土製品、縄文石器、古墳時代の土師器・須恵器などである。縄文土器は前期と中期が主体である。前期は黒浜式土器がやや多く、浮島式土器から前期末葉までが出土している。中期では五領ヶ台式がわずかに確認され、阿玉台式土器の古手が多く出土している。このような遺物の在り方は、谷を隔てて南側の台地に立地する五反田清水沢遺跡[5]との緊密な関係を示唆している。五反田清水沢の調査では、浮島式期から興津式期、阿玉台式期の時期を中心とする集落が形成され、竪穴住居12軒やフラスコ状土坑１基、土坑５基などが検出されている。さらに土製品や石鏃をはじめとする石器類が出土し、一定期間生活が営まれていたことが明らかになった。同時期に五反田清水沢遺跡に生活拠点を置いていた人々が、谷を隔てた北側に展開する当遺跡に活動範囲を広げて、その活動痕跡を残したといえよう。勿論、調査区外の平坦部に集落が存在する可能性は否定できないが、五反田清水沢遺跡を上回る集落の存在は考えられない。今回の調査は、太平洋水系に属する狭小な台地間の関係を示したといえよう。

註

1　(公財)千葉県教育振興財団 2019a『首都圏中央連絡自動車埋蔵文化財調査報告書34　―成田市大安場Ⅰ遺跡・辰巳ケ入遺跡・大安場Ⅳ遺跡・大安場Ⅴ遺跡・水の上Ⅰ遺跡・一坪田入Ⅱ遺跡・夜番Ⅱ遺跡・夜番Ⅰ遺跡―』

2　峰村　篤 2019「焼成前穿孔がある撚糸文土器について」『千葉縄文研究』９ 千葉縄文研究会

3　橋本勝雄 2015「移行期の半月形石器と両面加工石器群　―茨城県大洗町一本松遺跡出土の資料から―」『茨城県考古学協会誌』第28号　茨城県考古学協会

　橋本勝雄 2016「関東・中部における石鏃の出現とその系譜　―縄文草創期から縄文早期前半まで―」『茨城県考古学協会誌』第28号 茨城県考古学協会

4　及川　穣 2003「出現期石鏃の型式変遷と地域的展開　―中部高地における黒曜石利用の視点から―」『黒曜石文化研究』第２号　明治大学人文科学研究所

5　(公財)千葉県教育振興財団 2019b『首都圏中央連絡自動車埋蔵文化財調査報告書35　―多古町五反田清水沢遺跡(1)―』

写　真　図　版

図版 1

一桜田入Ⅶ調査区航空写真（国土地理院CB-89-20X-C29　平成4年10月撮影）

遺跡遠景

(3)調査区近景

(3)1トレンチ

(3)2トレンチ

(4)調査前風景

(4)表土除去後風景

(4)SK001

(4)SK001セクション

(3)土器出土状況

(3)石器出土状況

(4)遺物出土状況①

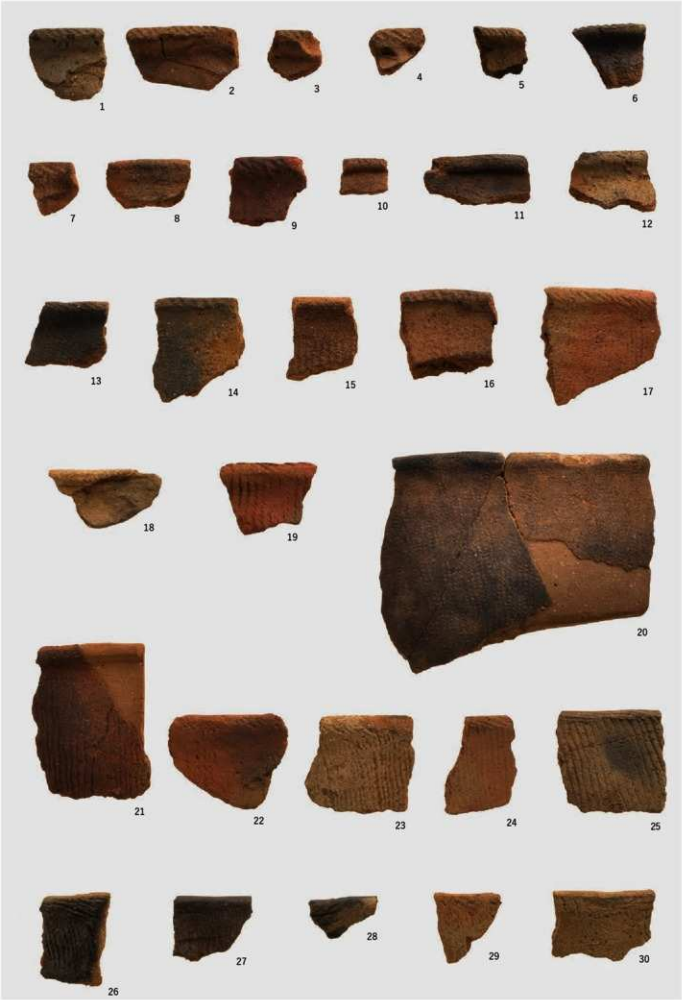
(4)遺物出土状況②

(4)遺物出土状況③

(4)遺物出土状況④

(5)調査前風景

(5)遺物出土状況


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

(3)・(4)出土縄文土器 1

(3)・(4)出土縄文土器２

55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86

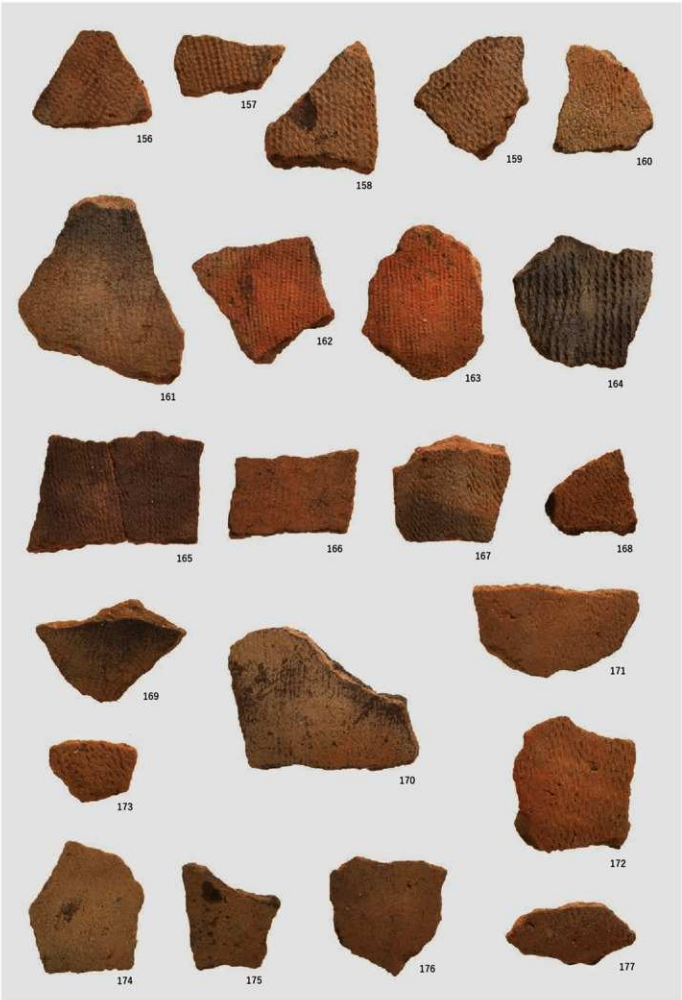
(3)・(4)出土縄文土器3

87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116

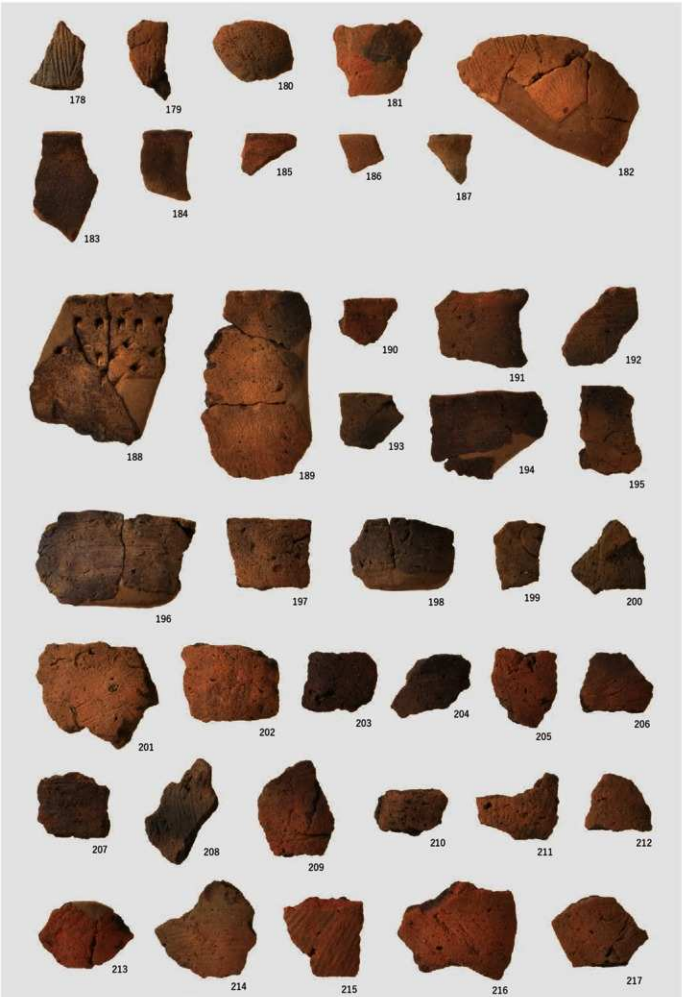
(3)・(4)出土縄文土器 4

117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155

(3)・(4)出土縄文土器5


156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177

(3)・(4)出土縄文土器 6


178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217

(3)・(4)出土縄文土器7

218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260

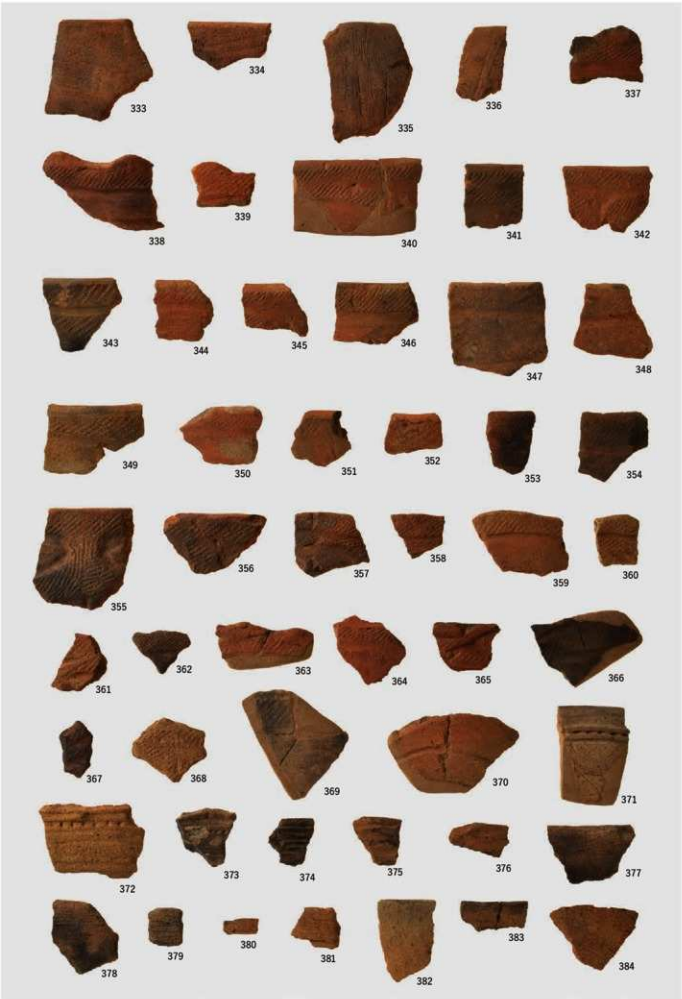
(3)・(4)出土縄文土器8

261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288

(3)・(4)出土縄文土器9

290
291
296
292
293
289
294
295
300
298
297
299
301
302
307
303
304
305
306
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
327
326
328
329
330
331
332

(3)・(4)出土縄文土器10


333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384

(3)・(4)出土縄文土器11

(5)出土縄文土器1

(5)出土縄文土器2

(3)～(5)出土土製品

1
尖頭器
硬質頁岩
2
尖頭器
緑色凝灰岩
3
有茎尖頭器
ガラス質黒色安山岩
4
石鏃
チャート
5
石鏃
チャート
6
石鏃
チャート
7
石鏃
チャート
8
石鏃
黒曜石
9
石鏃
チャート
10
石鏃
砂岩
11
石鏃
ガラス質黒色安山岩
12
石鏃
チャート
13
ヘラ状の石器
ガラス質黒色安山岩
14
掻器
ガラス質黒色安山岩
15
削器
ガラス質黒色安山岩
16
楕形石器
トロトロ石
17
微細剥離痕のある剥片
黒曜石
18
剥片
ガラス質黒色安山岩
19
剥片
ガラス質黒色安山岩
20
剥片
ガラス質黒色安山岩
21
石核
ガラス質黒色安山岩
22
剥片
玉髄
23
磨製石斧
角閃片岩
24
円礫製加工具
流紋岩
25
円礫製加工具
アプライト
26
円礫製加工具
チャート
27
円礫製加工具
砂岩
0
5cm
0
10cm

(3)～(5)出土石器

図版18

五反田栗島遺跡周辺航空写真（国土地理院CB74-C14B-25：昭和64年10月撮影）

調査区近景

調査状況

5T

6T

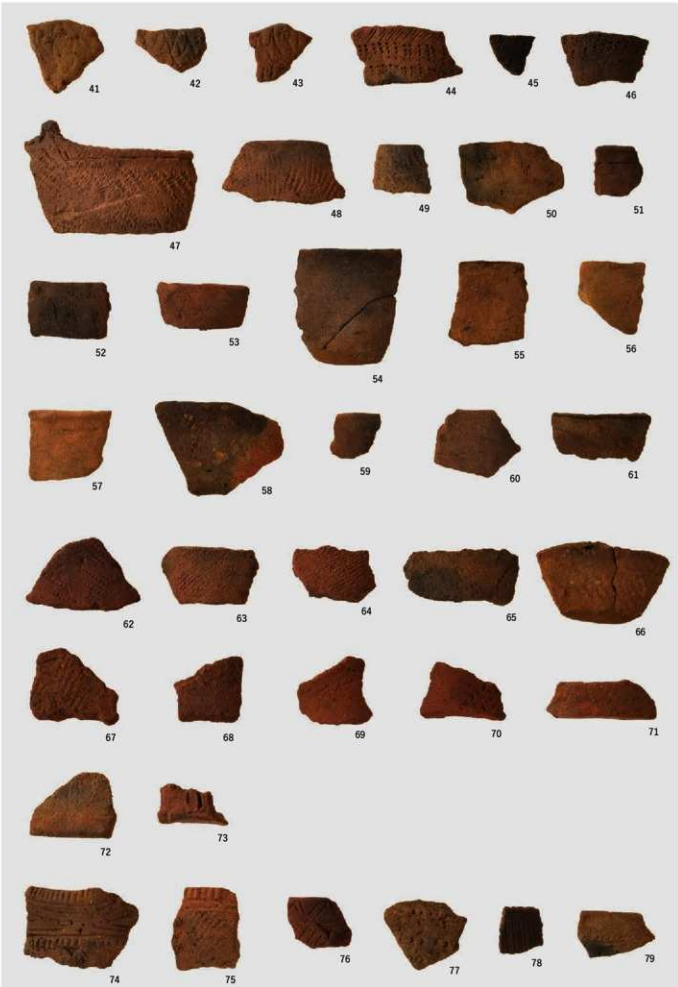
3T 4T拡張区遺物出土状況

SK001

SK001セクション

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40

縄文土器1


41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79

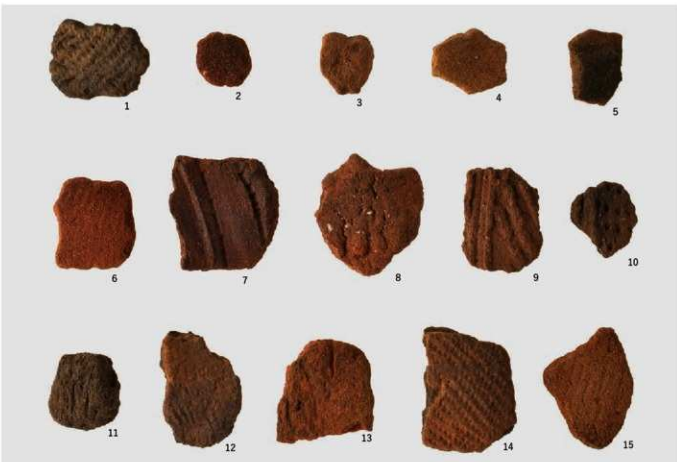
縄文土器2

80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123

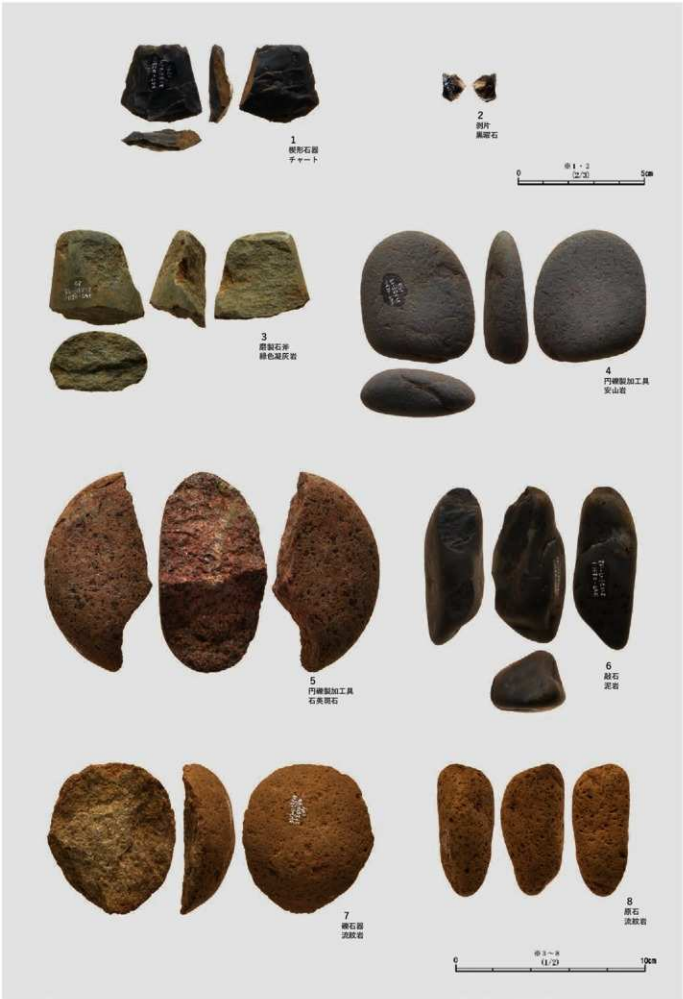
縄文土器3

124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
138
139
140
141
142
143
144
145

縄文土器4


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15

土製品


1
楔形石器
チャート
2
剥片
黒曜石
※1・2
(2/3)
0
5cm
3
磨製石斧
緑色凝灰岩
4
円礫製加工具
安山岩
5
円礫製加工具
石英斑石
6
敲石
泥岩
7
礫石器
流紋岩
8
原石
流紋岩
※3～8
(1/2)
0
10cm

縄文石器

報告書抄録

ふりがな	しゅとけんちゅうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書
副書名	成田市一坪田入Ⅱ遺跡(3)～(5)・多古町五反田栗島遺跡(1)
巻次	39
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第785集
編著者名	小林清隆・渡邊修一
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の２　　TEL 043(422)8811
発行年月日	西暦2021年３月19日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
一坪田入Ⅱ遺跡(3)～(5)（ひとつぼたいりにいせき）	千葉県成田市多良貝245-531ほか（ちばけんなりたしたらがい）	12211	090	35度47分52秒	140度24分16秒	20160809～20181107	2,618㎡	道路建設に伴う埋蔵文化財調査
五反田栗島遺跡(1)（ごたんだくりしまいせき）	千葉県香取郡多古町五反田字栗島91の一部ほか（ちばけんかとりぐんたこまちごたんだあざくりしま）	12347	023	35度44分00秒	140度26分25秒	20171106～20171117	2,413㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一坪田入Ⅱ遺跡(3)～(5)	包蔵地	縄文時代	陥穴　1基	縄文土器、土製品（円板）、縄文石器（尖頭器・有舌尖頭器・石鏃・掻器・削器・楔形石器・磨製石斧・円礫製加工具・剥片）	縄文時代早期の撚糸文系土器がややまとまって出土した。
五反田栗島遺跡(1)	包蔵地	縄文時代	土坑　1基	縄文土器、土製品（土錘・円板）、縄文石器（楔形石器・磨製石斧・敲石・円礫製加工具・剥片）、土師器、須恵器、銭貨	縄文時代前期末葉の土器と中期の阿玉台式土器の前半期の土器が出土した。

要約

今回の報告は、成田市に所在する一坪田入Ⅱ遺跡と香取郡多古町に所在する五反田栗島遺跡の２遺跡である。一坪田入Ⅱ遺跡は、利根川水系に属する尾羽根川に面する斜面に立地している。検出遺構は縄文時代の陥穴１基で、遺物は撚糸文系土器から晩期の浮線網状文系土器が出土した。特に撚糸文系土器の夏島式土器の占める割合が高い。ほかに石器が出土しているが、いずれも台地上から流れ込んだ状況で検出された。五反田栗島遺跡は、太平洋水系に属する多古橋川が東側に流れる標高37m前後の狭小な台地に立地している。検出遺構は土坑１基で、ほかに縄文土器と縄文石器などが出土した。縄文土器は前期後葉～中期前葉で、南側に入り込む谷を隔てて立地する五反田清水沢遺跡との関連がうかがわれる。

千葉県教育振興財団調査報告第785集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書39

－成田市一坪田入Ⅱ遺跡(3)～(5)・多古町五反田栗島遺跡(1)－

令和３年３月19日発行

編　　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団

発　　行　東日本高速道路株式会社
千葉市美浜区若葉２－９－３

公益財団法人　千葉県教育振興財団
千葉県四街道市旭波809番地の２

印　　刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町１－10－６